

南相馬市内遺跡発掘調査報告書2

— 平成16・17年度調査報告 —

加賀後遺跡

大田和広畑遺跡 (平成16・17年度)

北原貝塚遺跡群

片草南原遺跡

荒神前遺跡

日向横穴墓群

葛蒲沢野馬土手

平成18年3月

南相馬市教育委員会

序 文

文化財は、我国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、南相馬市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつある一方で、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では、埋蔵文化財の保護のため、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡についての保存協議を行い、保存が困難な場合については、記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成16・17年度に国及び福島県の補助金を得て実施した南相馬市小高区内遺跡発掘調査事業の発掘・試掘調査の成果報告書です。今後この報告書を、埋蔵文化財の保護、地域史研究のために活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、地権者の皆様をはじめ、調査にご協力いただきました方々に、心から感謝を申し上げます。

平成18年3月

南相馬市教育委員会
教育長 青木 紀 男

例 言

1. 南相馬市は、原町市・相馬郡小高町・同鹿島町の1市2町による市町村合併を経て、平成18年1月1日付で誕生した新市である。
2. 本報告書に記載した内容は、旧小高町教育委員会が実施した発掘調査・試掘調査の成果報告である。
3. 調査にかかる経費は、国及び福島県の補助金の交付を得ている。
4. 発掘調査は、以下の体制で実施した。

平成16年4月1日～平成17年12月31日

調査主体 小高町教育委員会

事務局 小高町教育委員教育総務課

平成18年1月1日～平成18年3月31日

調査主体 南相馬市教育委員会

事務局 南相馬市教育委員会文化課

教育長 荒川 登

教育総務課長 阿部 貞康

課長補佐 高橋 清

主任主査 小高 千舟

主 事 安部 幹洋

主 事 木幡 尋絵

調査担当 教育 総務 係

学 芸 員 川田 強

主 事 佐川 久

教育長 青木 紀男

事務局長 風越 清孝

事務局次長 藤原 直道

文化課長 鳥中 清

課長補佐 引地 芳典

主 事 佐藤 友之

主 事 北原 美紀

事務補助 佐山 恵美

調査担当 文 化 財 係

係 長 堀 耕平

副 主 査 川田 強

副 主 査 荒 淑人

学 芸 員 佐川 久

嘱託学芸員 藤木 海

・整理補助員 牛渡由起子・松崎孝子・松本経子・渡部定子

・発掘補助員 各調査遺跡に掲載。

5. 発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げる。

福島県相双建設事務所、上浦行政区、大田和行政区、浦尻行政区、片草行政区、塚原行政区、羽倉行政区、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東北（順不同 敬称略）

6. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の方々から指導・助言を得た。記して感謝申し上げる。

文化庁文化財部記念物課、福島県教育庁生涯学習・文化スポーツ領域文化財グループ、

福島県立博物館、(財)福島県文化振興事業団、福島県文化財センター白河館まほろん、森 幸彦（福島県

立博物館) 青山博樹, 松本 茂 (福島県文化振興事業団) 松本太郎 (千葉県市川市教育委員会),
長谷川 真 (岩手県宮古市教育委員会) 三瓶秀文 (富岡町教育委員会) 中島広顕 (東京都北区教育委員会)
玉川一郎, 藤沼邦彦, 樋泉岳二, 山田昌久 (浦尻貝塚調査指導委員会) (順不同・敬称略)

7. 本報告書の編集は佐川・川田・荒がおこなった。執筆分担は下記のとおりである。

佐川 久: 第二章、第三章第1節第4項1~4・5(2)~(4)・第5項1、第四章、第五章

川田 強: 第三章第1節第4項5(1)、第5項2

荒 淑人: 第1章

8. 調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 図中の方位は真北方向を示し、水系レベルは海拔高度を示す。
2. 遺物の断面は白抜きで図示した。
3. 掲載した遺構・遺物の縮尺率は、図版の右下に記載し、挿図下方にスケールを付している。
4. 平面図ならびに断面図に用いたスクリーントーンは以下の内容を示す。

遺構  = 柱痕跡

遺物  = 黒色処理  = 赤影 ▲ = 繊維混入

5. 断面図の土層は、基本層位をL1・L2…で、遺構堆積土をℓ1・ℓ2…で表示した。
6. 本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。

T: トレンチ G: グリット SB: 掘立柱建物跡 SA: 柱列跡 SK: 土坑 P: ピット

目 次

序 文	I
例 言	III
凡 例	IV
目 次	V
挿 図 目 次	VI
表 目 次	VI
図 版 目 次	VI

第 I 章 南相馬市を取り巻く環境

第 1 節 地 理 的 環 境	1
第 2 節 歴 史 的 環 境	4

第 II 章 調査に至る経過

第 1 節 調査に至る経過	9
---------------------	---

第 III 章 開発に伴う発掘調査

第 1 節 加 賀 後 遺 跡	11
-----------------------	----

第 IV 章 開発に伴う試掘調査

第 1 節 大田和広畑遺跡	45
第 2 節 北原貝塚遺跡群	53
第 3 節 片草南原遺跡	56
第 4 節 荒神前遺跡	60
第 5 節 日向横穴墓群	62

第 V 章 保存目的の調査

第 1 節 葛蒲沢野馬土手	65
---------------------	----

写 真 図 版
報 告 書 抄 録
奥 付

挿 図 目 次

図1	南相馬市位置図	1	図23	遺物包含層出土土製品	34
図2	南相馬市内地質図	3	図24	遺物包含層出土石器	35
図3	主要遺跡位置図	8	図25	遺構外出土遺物	35
図4	調査遺跡位置図	10	図26	大田和広畑遺跡位置図	45
図5	加賀後遺跡位置図	11	図27	平成16年度調査地点	47
図6	調査状況図	12	図28	平成17年度調査地点	48
図7	調査区全体図	14	図29	遺物包含層断面図	49
図8	1号掘立柱建物跡実測図	15	図30	遺物包含層出土遺物	50
図9	2号掘立柱建物跡実測図	17	図31	北原貝塚遺跡群位置図	53
図10	1号柵列跡実測図	18	図32	調査状況図	54
図11	柱穴実測図	19	図33	1号トレンチ平面図	55
図12	土坑・ピット実測図	21	図34	片草南原遺跡・ 荒神前遺跡位置図	56
図13	1号土坑出土遺物	22	図35	調査状況図	57
図14	2号土坑出土遺物	23	図36	トレンチ平面図	58
図15	遺物包含層断面図	24	図37	調査状況図	61
図16	遺物包含層出土遺物①	27	図38	日向横穴墓群位置図	63
図17	遺物包含層出土遺物②	28	図39	調査状況図	63
図18	遺物包含層出土遺物③	29	図40	野馬土手全体図	66
図19	遺物包含層出土遺物④	31	図41	調査状況図	68
図20	遺物包含層出土遺物⑤	32	図42	野馬土手断面図・断面模式図	68
図21	遺物包含層出土遺物⑥	33			
図22	遺物包含層以外出土遺物	34			

表 目 次

表1	1号土坑出土土器観察表	39	表6	加賀後遺跡出土石器観察表	44
表2	2号土坑出土土器観察表	39	表7	加賀後遺跡遺構外 出土土器観察表	44
表3	2号土坑出土石器観察表	39	表8	大田和広畑遺跡出土 縄文土器観察表	52
表4	加賀後遺跡出土縄文・ 弥生土器観察表	40			
表5	加賀後遺跡出土土製品観察表	44			

図 版 目 次

図版1	加賀後遺跡(試掘調査)	72	図版3	加賀後遺跡(本調査)	74
1	23トレンチ調査状況		1	S B 01・02、S A 01 検出状況	
2	24トレンチ調査状況		2	S B 01 - P 33 断面	
図版2	加賀後遺跡(本調査)	73	3	S B 01 - P 33 完掘	
1	A地点調査状況①		4	S B 01 - P 36 断面	
2	A地点調査状況②		5	S B 01 - P 36 完掘	

図版 4	加賀後遺跡 (本調査)……………	75	図版 13	北原貝塚遺跡群・片草南原遺跡跡	84
1	SB 02-P 37 断面		1	北原貝塚遺跡群 15 トレンチ調査状況	
2	SB 02-P 37 完掘		2	北原貝塚遺跡群 14 トレンチ調査状況	
3	SB 02-P 41 断面		3	片草南原遺跡 1 トレンチ調査状況	
4	SB 02-P 41 完掘		4	片草南原遺跡 2 トレンチ調査状況	
5	SA 01-P 32・59 断面		5	片草南原遺跡 3 トレンチ調査状況	
6	SA 01-P 32・59 完掘		6	片草南原遺跡 7 トレンチ調査状況	
7	SA 01-P 44 断面		図版 14	荒神前遺跡・日向横穴墓群	85
8	SA 01-P 44 完掘		1	荒神前遺跡 7 トレンチ調査状況	
図版 5	加賀後遺跡 (本調査)……………	76	2	日向横穴墓群 1 トレンチ調査状況	
1	SK 01 遺物出土状況		3	日向横穴墓群 2 トレンチ調査状況	
2	SK 01 完掘		4	日向横穴墓群 3 トレンチ調査状況	
3	SK 02 遺物出土状況①		5	日向横穴墓群 4 トレンチ調査状況	
4	SK 02 遺物出土状況②		図版 15	葛蒲沢野馬土手……………	86
5	SK 02 断面		1	1 トレンチ調査状況	
6	SK 02 完掘		2	1 トレンチ断面①	
7	SK 03 完掘		3	1 トレンチ断面②	
8	遺物包含層北壁断面		4	1 トレンチ石垣検出状況	
図版 6	加賀後遺跡 (本調査)……………	77	5	2 トレンチ調査状況	
	加賀後遺跡出土遺物①		6	2 トレンチ石垣検出状況	
図版 7	加賀後遺跡 (本調査)……………	78	7	石垣現況	
	加賀後遺跡出土遺物②		8	土手現況	
図版 8	加賀後遺跡 (本調査)……………	79			
	加賀後遺跡出土遺物③				
図版 9	加賀後遺跡 (本調査)……………	80			
	加賀後遺跡出土遺物④				
図版 10	加賀後遺跡 (本調査)……………	81			
	加賀後遺跡出土遺物⑤				
図版 11	加賀後遺跡 (本調査)……………	82			
	加賀後遺跡出土遺物⑥				
図版 12	大田和広畑遺跡 (平成 17 年度)	83			
1	10 トレンチ調査状況				
2	10 トレンチ断面				
3	10 トレンチ埋設土器検出状況				
4	12 トレンチ調査状況				
5	12 トレンチ断面				
6	12 トレンチ遺物出土状況				
7	表土掘削状況				
8	作業風景				

第I章 南相馬市を取り巻く環境

第1節 地理的環境

福島県南相馬市は福島県太平洋岸のほぼ中央に位置する、人口約73,700人、面積約398.5km²の当地方の産業・政治面における中核都市である。本市は平成18年1月1日付で、これまでの原町市、相馬郡小高町、同鹿島町の1市2町によって誕生した新市である。

南相馬市が位置する福島県は、東北地方太平洋側の最も南に位置し、北には宮城県・山形県が、西には新潟県・南には茨城県と栃木県で県境を接している。

福島県全体の地形を概観すると、県内を阿武隈高地と奥羽山脈の二つの山脈が縦断し、地形的には太平洋に面する浜通り地方、阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれた中通り地方、そして新潟県と接する会津地方に区分される。会津地方は周囲を山地に囲まれた盆地状平原を呈しており、中通り地方は阿武隈高地と奥羽山脈間を流れる阿武隈川によって開析された沖積地が開けている。太平洋に面した浜通り地方は阿武隈高地の山間部と小規模な低丘陵の間に開析された沖積平野で構成される。



図1 南相馬市位置図

このような福島県において、南相馬市は太平洋岸に面した浜通り地方の中央やや北寄りに位置している。行政境としては、北は相馬市・南は双葉郡浪江町・西は相馬郡飯館村と接し、主要交通網は市内を南北に縦走するJR常磐線と国道6号であり、首都圏への移動や仙台・市内などへの通勤・通学手段として利用されている。近年では高規格道路としてその機能が期待されている常磐自動車道の建設が進められており、市内の道路網のあり方が大きく変容しつつある。

市内の地形に目を向けると、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される低丘陵と丘陵間に開析された沖積平野で構成される。阿武隈高地にかかる西側の丘陵は、山頂がなだらかな隆起準平原を呈し標高は100～150mを測る。標高は東部の海岸部に向かうにつれて低くなり、市内中心付近の標高は50～60m前後、海岸部では20～30mとなる。

地質的には阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯、双葉丘陵地域（岩沼-久之浜構造線）によって明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地は東西約50km・南北約200kmの規模を有し、古生代から新生代中頃・新第三紀中新生に至る地質を有し、北上高地と並んで日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアバラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩・変成岩類である。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された大年寺層と總称される固結度の低い凝灰岩質砂岩ならびに泥岩で構成されており、双葉断層により上層部の相双丘陵（滝の口層）と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。丘陵部では第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動によって海成及び河成の段丘が構成されている。段丘は大きく高位・中位・低位の3区分され、それぞれが第Ⅰ～Ⅲ段丘堆積物と細分されている。真野川流域では高位段丘堆積物が発達し、所々に自然堤防堆積物が見られる。新田川・太田川流域では上部に風化火山灰層をのせた礫及び砂で構成される高位第Ⅰ段丘堆積物と中位第Ⅱ段丘堆積物が広く発達し、小高川流域では中位第Ⅰ・第Ⅱ段丘が顕著である。また、低丘陵の間には各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。宮田川河口では、かつて井田川浦という東西1.8km、南北1kmという大きな潟湖が形成されており、大正末期～昭和初期にかけて干拓されている。潟湖を形成した浜堤は、浦尻貝塚の東に位置する北原貝塚遺跡群の東側の堤状段丘から北に約1.7kmの広範囲に展開している。小高川河口においても浜堤と前川浦という潟湖が残されている。

市内の標高20m以下の地点では縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられている。大木2a式期の遺跡である萱浜赤沼遺跡の調査では縄文時代の海水面を標高6m前後に求められており、浦尻貝塚の調査では貝層から出土した魚骨類から縄文時代の自然環境が復元されており、目覚しい成果が上がっている。

<参考文献>

- 長島雄一 1983 『赤沼遺跡試掘調査報告書』 原町市教育委員会
- 玉川一郎 1985 『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』 原町市教育委員会
- 川田強他 2004 『浦尻貝塚』 1 小高町教育委員会
- 原町市史編纂委員会編 2005 『原町市史』 8 特別編Ⅰ自然 原町市

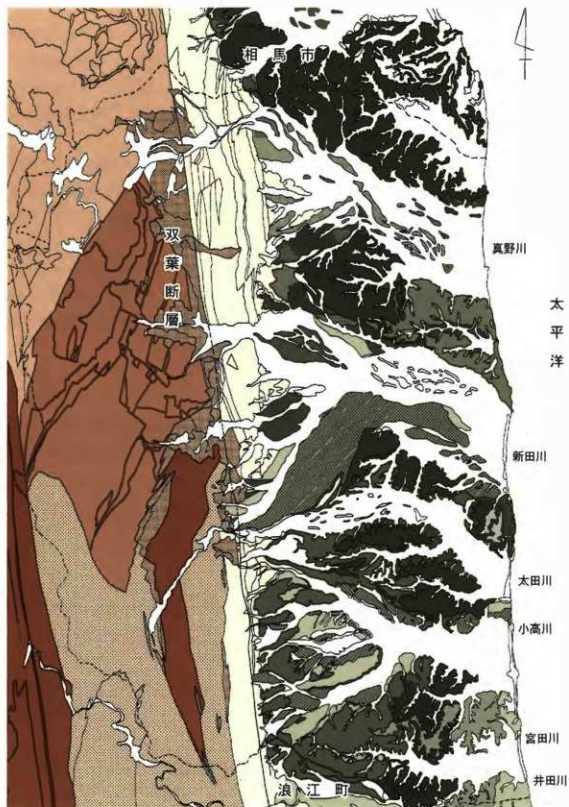


図2 南相馬市内地質図

第2節 歴史的環境

南相馬市で確認されている旧石器時代の遺跡としては、上真野川南岸の段丘上にある八幡林遺跡 (1)、太田川流域の畦原段丘面にある畦原 A・C 遺跡 (2・3)・熊下遺跡 (4)・袖原 A 遺跡 (5)・雲雀ヶ原扇状地にのる陣ヶ崎 A 遺跡 (6)・南町遺跡 (7)・橋本町 A・B 遺跡 (8・9)・桜井遺跡 (10)、小高川の支流である北鳩原川南岸にある萩原遺跡 (11) の 11 遺跡がある。後期旧石器時代の細石刃文化を代表するものが多く見られる。

縄文時代の遺跡は真野川・新田川・太田川・小高川・宮田川などの各地域を代表する河川に沿って分布している。真野川上流域の上榑窪にある宮後 A 遺跡 (12)・宮後 B 遺跡 (13) からは、大木 7a ~ 10 式の縄文時代中期のものが多く出土し、その他には後期の綱取 I 式・新地式や晩期の粗製土器の出土もある。

上真野川と真野川に合流地点の南岸には八幡林遺跡 (1) があり、中期の大木 10 式の複式炉を伴う住居跡をはじめとして、早期の田戸下層式・前期の大木 5 式・中期の大木 8a ~ 10 式・後期の綱取 I・II 式・晩期の大洞 A ~ A' 式にかけた各時期の土器が出土しており、この場所で長期間存続した集落が存在していることを示す重要な遺跡と言える。

新田川・太田川流域では、山間部の片倉八重米坂 A 遺跡 (14)・羽山 B 遺跡 (15)・畦原 F 遺跡 (16) で早期から前期にかけた時期の遺構・遺物が確認されている。海岸部にある登浜の赤沼遺跡 (17) では大木 2a、雫の犬返遺跡 (18) では前期前半の土器が出土している。中期では阿武隈高地裾部にある押釜の前田遺跡 (19)、新田川北側の台地上にのる高松遺跡 (20) では大木 8 ~ 10 式の土器が出土し、植松 A 遺跡 (21) では大木 10 式の土器と複式炉をともなう住居跡が調査されている。後期から晩期の遺跡では、上太田の上ノ内遺跡 (22)・町川原遺跡 (23) は後期の綱取式を出土する。片倉の羽山遺跡 (24) では晩期の大洞 C1 ~ A 式が、高見町 A 遺跡 (25) では晩期中葉の土器と石囲炉をもつ住居跡が調査されている。

小高川・宮田川流域では貝塚を形成する集落が密集する。古い時期では宮田川流域の宮田貝塚 (26)・加賀後貝塚 (27)、小高川流域の片草貝塚 (28) などは海岸線から離れた内陸部に位置し、前期前半の年代が想定される遺跡である。前期後半以降の貝塚遺跡は宮田川・井田浦の浦尻貝塚 (29) や中期中葉に角部内南台貝塚 (30) が代表的な貝塚として知られている。特に浦尻貝塚では前期後半から晩期中葉までの間、断続的ながらも長期間にわたる貝層が確認され、縄文時代全般を通じた生活様相や自然環境の変遷が把握されている。平成 18 年には国史跡に指定され、将来にわたる保存が決定された。

弥生時代としては真野川南岸の天神沢遺跡 (31) や新田川南岸の桜井遺跡 (10) が著名であったが、近年では少しずつではあるものの資料の増加を見ている。時期的に区分して見ると、前期から中期初頭まで遡る可能性のある遺跡は未確認で、具体的な様相についてはわからない。

集落や土器の出土が増加するのは中期からで、桜井古墳 (32) や川内廻 B 遺跡群 F 地点 (33) では樹形囲式が出土し、その他の遺跡では桜井式土器が多量に出土する。ただし、樹形囲式・

桜井式期の遺跡についても良好な遺構はなく、集落の具体的な様相については不明である。

桜井式土器の標式遺跡となる大規模な集落遺跡が、新田川下流域の河岸段丘面に営まれた桜井遺跡(10)である。本遺跡については詳細な調査を経てはいないものの、多量の土器や各種の磨製石器が採取されており、この場所が弥生時代における拠点的な集落であった可能性が高い。桜井遺跡以外では、天神沢遺跡(31)が豊富な石器群が出土することで著名である。出土する石器群には石庖丁、扁平片刃石斧、太形蛤刃石斧・ノミ型石斧、打製石斧などがある。石庖丁には未完成の資料も含まれており本遺跡が石庖丁の製作工房遺跡であると評価され、これらの石器群は桜井遺跡において使用されたと考えられている。

後期から終末になると明確な遺構・遺物の数は激減するが、高見町A遺跡(25)からは北関東を中心に分布する十王台式土器が確認され、この地域が十王台式土器の文化圏に含まれていた可能性がある。一方で東北・関東地方にかけた広範囲に分布する天王山式土器の出土が少ない点は、この地域の弥生時代終末期から古墳時代初頭の特徴と言える。

古墳時代では、新田川南岸の河岸段丘上に前方後方墳として東北地方第4位の規模を誇る桜井古墳(32)が築造され、周辺古墳と共に桜井古墳群上渋谷支群(34)・同高見町支群(35)を構成する。このうち国史跡桜井古墳、同古墳群上渋谷支群7号墳は4世紀後半の築造年代が与えられる。真野川流域の柚原古墳群(36)は円墳9基からなる小規模な古墳群であるが、周溝内からは塩釜式土器が出土し、桜井古墳群とは異なった前期古墳群のありかたを示している。当該期の集落遺跡の調査例は多くないが、高見町A遺跡(25)、桜井B遺跡(37)では東北地方の塩釜式土器や東海に採譜をもつと考えられるS字状口縁台付甕、棒状浮文をもつ加飾壺などが出土している。小高川流域の東広畑B遺跡(38)でも塩釜式土器が出土し、貴重な資料が得られている。

中期では唯一太田川流域にある太田前田古墳(39)が中期に築造された可能性がある古墳である。真野川流域では真野古墳群(40)・横手古墳群(45)は円筒埴輪を伴うことから、その造営開始は中期末まで遡る可能性がある。この時期の集落は新田川流域の前屋敷遺跡(42)で、いわゆる南小泉式の甕・高杯を多く出土する竪穴住居1軒が調査されている。この住居はカマドを有する以前のものであることから、中期でも古い様相を示すと考えられる。

古墳時代後期になると、新田川流域の桜井古墳群高見町支群、真野川流域の国史跡真野古墳群(40)、福島県史跡横手古墳群(41)など各河川流域で本格的に古墳群の造営が開始される。真野古墳群は100基を超える東北地方を代表する後期群集墳であり、寺内地内のA地区と小池地区のB地区に区分される。A地区の前方後円墳である20号墳からは国内では出土例が極めて少ない金銅製双魚袋金具が出土し、本古墳群の被葬者について大きな問題を提示している。横手古墳群は30m規模の前方後円墳を中心とするA地区と、30m規模の円墳を中心とするB地区に分けられている。A地区1号墳は切石を用いた典型的な横穴式石室を採用した前方後円墳であり、古墳時代後期でも新しい時期に築造されたと考えられる。これらの大規模群集墳が築造される一方で、市内の低位丘陵上では小規模な前方後円墳と円墳で構成される古墳群や円墳や方墳で構成される小規模な古墳群が造営される。後期の集落様相は調査例の少なさもあり、

詳細は不明であるが、真野川南岸の沖積地にある大六天遺跡(42)や迎畑遺跡(43)などでは住社式から栗圃式の住居跡や土坑などが、低位丘陵上で調査された地蔵堂B遺跡(44)は住社式期、小高川流域の一里壇古墳群(45)では舞台式を出土する。同じく中村平遺跡(46)では栗圃式新段階の住居跡が確認され、古墳時代終末の集落遺跡についても徐々に資料の増加を見ている。

終末期に造営される横穴墓については、各河川において大きな分布状況の隔たりはみられず、終末期の普遍的な墓制と言える。このうち真野川の大窪横穴墓群(47)・太田川の羽山横穴墓群(48)、小高川の浪岩横穴墓群(49)は玄室に装飾をともなう形態であることが知られている。羽山横穴(48)は渦巻文・人物・動物などが描かれており、双葉町清戸追横穴、泉崎村泉崎横穴との共通性が指摘される。また、真野川流域の中谷地横穴墓群は(50)複室構造であり、いわき市中田横穴との類似性がうかがえる。

奈良・平安時代における律令体制になると、南相馬市の全域と飯館村の一部が陸奥国行方郡家の支配する行政領域に編成される。行政の中心地となる行方郡家は新田川河口に造営された泉麿寺跡(51)であることが明らかとなっている。泉麿寺跡は新田川河口付近の河岸段丘縁辺から沖積地に立地し、遺跡に関連する遺構群は東西約1km、南北約200mの約120,000㎡の範囲に広がっている。また、古代の瓦が出土することや建物の基礎となる礎石が遺存していることから昭和31年に福島県史跡に指定された。調査の結果、郡家は7世紀末に造営が開始され10世紀代に廃絶するまでの間に、2度の大きな改変を経ながら律令政府の地方行政支配の拠点として機能していたことが明らかとなっている。郡家には郡庁・正倉・館といった施設とともに、運河状施設や各種瓦が出土することから寺院の存在も示唆される。泉麿寺跡の西側では路面状の硬化面と道路側溝の可能性のある溝があり、郡家に接して道路が建設されていた可能性もある。律令時代の行政構造を知るうえで重要な発見であり、その全容解明が待たれる。

市内には泉麿寺跡以外にも古代の瓦が散布する遺跡が認められる。すなわち真野川北岸の横手麿寺跡(52)、真野川南岸の真野古城跡(53)、新田川北岸の植松麿寺跡(54)、入道鉋瓦窯跡(55)、太田川河口域の丘陵にある京塚沢瓦窯跡(56)、犬返瓦窯跡(57)である。このうち入道鉋瓦窯跡は植松麿寺跡の瓦を焼成し、京塚沢瓦窯跡・犬返瓦窯跡は泉麿寺跡に瓦を供給した生産遺跡である。植松麿寺跡・横手麿寺跡は発掘調査が行われていないが、郡内有力豪族の氏寺の可能性がある。

生産関連遺跡では真野川・新田川・太田川の各河川両岸の低位丘陵で製鉄に関連した遺跡が確認されている。特に新田川と真野川の間に展開する金沢製鉄遺跡群(58)は東日本でも最大規模の製鉄関連遺跡であり、7～9世紀後半にかけて継続した操業が行われ、製鉄炉や木炭窯などの各施設の具体的な変遷が判明している。太田川と小高川に挟まれた丘陵では蛭沢・川内鉋B遺跡群(59)・出口遺跡(60)・大塚遺跡(61)などの製鉄遺跡が点在している。蛭沢遺跡(62)・川内鉋B遺跡群は、具体的な内容が判明している希有な例である。遺跡は8世紀後半から9世紀後半にかけて製炭・精錬を行っている。特に廃滓場からは獣脚・器物の生産にかかわる鋳型が出土し、この遺跡で火舎などの仏具生産に関わっていたことが知られ、当地方において宗教活動が行われていたことを示す重要な発見である。

これらの遺跡で多くの知見が得られている一方で、集落遺跡の調査例は決して多くなく、広畑遺跡(62)・大六天遺跡(42)などが知られるに限る。新田川の沖積地内の広畑遺跡は、泉廃寺跡に隣接する遺跡である。溝に投棄された土器には「寺」「厨」など官衙に関連する墨書が見られ、また灰軸陶器も出土しており泉廃寺跡との密接な関係が想定される。

真野川南岸の大六天遺跡は、竪穴住居や土坑内に投棄された土器や円面硯、「小穀殿」と刻書された土師器杯を出土し、一般集落とは異なった様相を持つ。特に小穀殿の刻書土器は古代軍団制との関係が示唆される点で興味深い。太田川流域の町川原遺跡(23)では8世紀から9世紀後半の集落が見つまっている。竪穴住居を主体とする集落で、墨書土器や円面硯などの遺物とともに銅製の帯金具が出土しており、行政機構と集落の深い関係がうかがえる。

中世の代表的な遺跡としては城館跡が挙げられる。古い時期の遺跡から概観すると、下総国から下向した相馬氏の最初の居城となる太田川北岸の別所館跡(64 現太田神社)や、新田川と水無川に挟まれた丘陵突端に築かれた牛越城跡(65)は、相馬氏下向以前からの城館跡として知られている。別所館跡・牛越城跡はそれぞれ太田氏、牛越氏の居城であると伝えられており、特に牛越城跡は本丸・二の丸・三の丸・空堀・帯曲輪・腰曲輪・妙見館などが残っており、戦国から近世初頭には、短い期間ではあるが相馬氏の本拠として機能する。

小高川の氾濫原に延びた台地上に築かれた小高城跡(66)は典型的な中世城館である。台地の頸部を切断することで空堀とし、四周に壕や池をめぐらし、頂には土塁を築く。本館跡は下総国から奥州に下向した相馬氏の居城となり、嘉暦元年から慶長16年に相馬利胤が中村城を築城するまでの約285年間相馬氏の本拠として重要な役割を占めた。

新田川下流域の城館遺跡では泉平館跡(67)、泉館跡(68)、下北高平館跡(69)で調査が行われている。相馬一族岡田氏の居城とされる中世末の泉平館跡では、郭を囲む小規模な畝堀を伴う堀跡と出入口が発見されている。この調査で堀跡から出土した木製呪符は中世信仰を知る上で貴重な資料である。泉館跡は、阿武隈高地から太平洋に向かって延びる丘陵の突端に立地し、相馬氏の流れをくむ泉氏の居城である。館跡の構造は部分的な小規模な改変を受けてはいるもの曲輪などの遺構は極めて良好な状態で遺存しており、その範囲は東西100m×南北60mと推定されている。また、平成9年度に実施した泉廃寺跡10次調査では、12・14世紀頃の舶載陶磁器を含む中世陶磁器が出土しており、相馬氏下向以前の地方支配の状況を知ることができ城館跡である。

近世の遺構は、寛文6年(1666)以降に築かれた野馬土手と出入口となる木戸跡や相馬氏の居城とされた牛越城跡がある。野馬土手は、雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmの範囲に築かれる。その大部分は土塁であるが菖蒲沢では石垣積みの部分もありその形態は多様であったようである。木戸跡は多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、その姿を遺しているものは羽山岳の木戸跡(70)一ヶ所だけとなっている。

近世後半から近代にかけては中村藩の大規模なたたらである馬場鉄山(71)や正福寺跡(72)、法輪寺跡(73)などで近世墓域の調査が行われている。

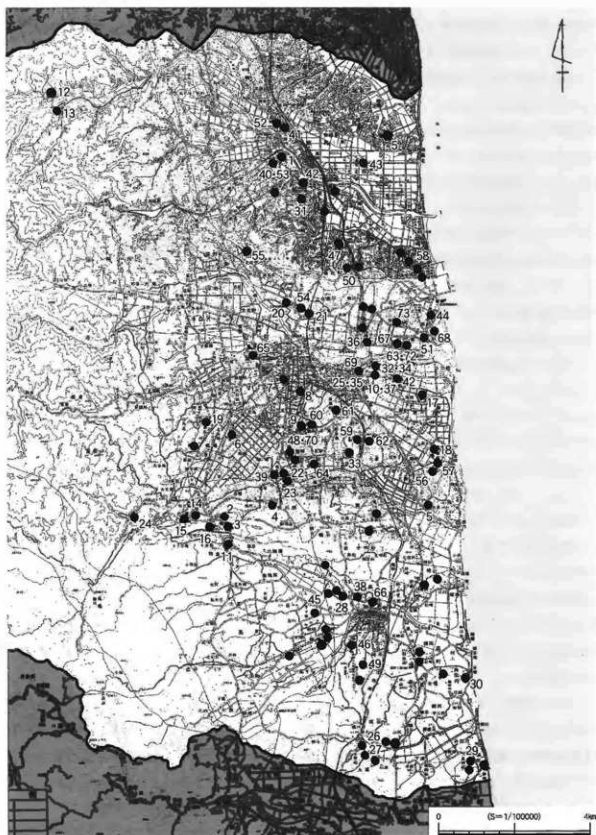


圖3 主要遺跡位置圖

第Ⅱ章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

旧小高町における国庫補助金対象事業として実施した調査は、平成16年度で7件、平成17年度で3件である。これらの調査のうち、各種開発に対して埋蔵文化財の保存協議資料を得るために実施した試掘調査は、平成16年度で6件、平成17年度で1件である。開発に伴う試掘調査を実施した遺跡は、加賀後遺跡、大田和広畑遺跡、北原貝塚遺跡群、片草南原遺跡、荒神前遺跡、日向横穴墓群である。

保存目的で実施した調査は、平成16年度で浦尻貝塚の1件、平成17年度で浦尻貝塚ならびに菖蒲沢野馬土手の2件である。浦尻貝塚の調査については、平成16年度の調査は『浦尻貝塚1』で報告されており、平成17年度調査については平成18年度に報告書を作成する予定があるため、本報告書では、浦尻貝塚を除いた調査を報告する。

加賀後遺跡は、宮田川の流域に所在する縄文時代から平安時代の遺物散布地である。遺跡範囲内には加賀後貝塚が確認されている。加賀後遺跡は個人宅地建設に伴い試掘調査を実施し、縄文前期前半の遺物包含層および古墳時代の遺構が確認されたため、本調査をおこなった。開発面積は562.1㎡である。

大田和広畑遺跡は、小高川流域に所在する縄文中期末から後期前半の集落跡・散布地である。県道中ノ内・小高線整備事業に伴い、試掘調査を平成16年度及び平成17年度の2カ年にわたり実施した。調査対象範囲は平成16年度では900㎡で、平成17年度では687.28㎡である。

北原貝塚遺跡群は、宮田川流域の明治期まで潟湖であった井田川浦の南に位置する縄文時代から平安時代の集落跡・散布地である。調査は、旧町道改良事業に伴い実施された。調査対象範囲は4,869㎡である。

片草南原遺跡・荒神前遺跡は隣接した遺跡であり、両遺跡とも縄文時代から平安時代の集落跡・散布地として知られている。また、両遺跡とも範囲内に古墳時代後期の古墳群を有している。さらに、荒神前遺跡内には縄文前期の片草貝塚も所在する。片草南原遺跡は、町営グラウンド造営に伴い11021.8㎡を対象に試掘調査を実施した。荒神前遺跡は、旧町道改良事業に伴い872.8㎡を対象に試掘調査を行った。

日向横穴墓群は、古墳時代終末の横穴墓群であり、1号墓は市指定史跡である。個人住宅建設に伴い試掘調査が実施された。調査対象面積は1,124.88㎡である。

菖蒲沢野馬土手は、相馬野馬追に関連した数少ない資料であり、阿武隈高地東側縁辺部に位置している。今回の試掘調査・測量調査は、今後の保存管理の協議の資料を得るために行われた。調査対象面積は1,500㎡である。

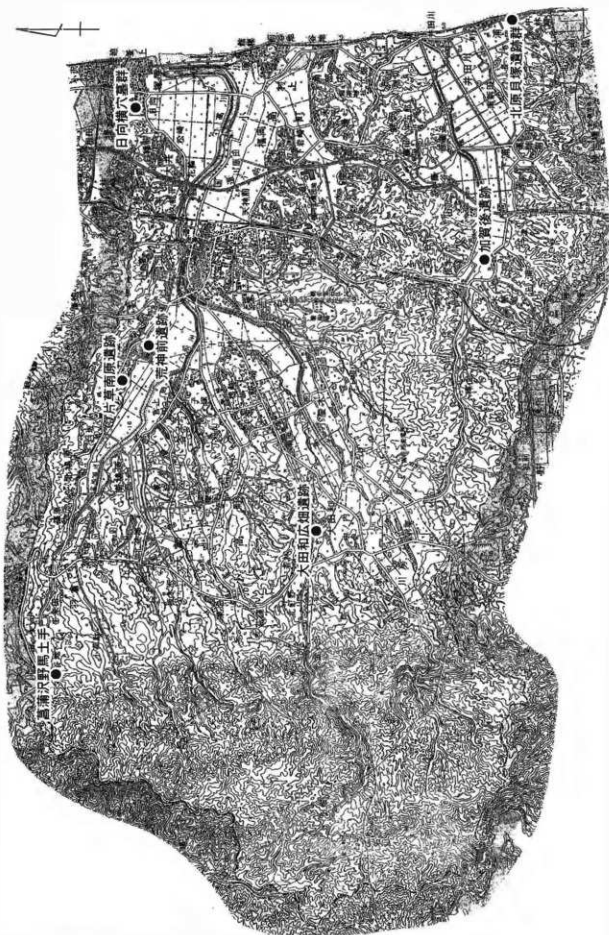


図4 調査遺跡位置図 (S=1/60000)

第Ⅲ章 開発に伴う発掘調査

第1節 加賀後遺跡

第1項 調査に至る経過

個人住宅建設に際して埋蔵文化財発掘の有無についての照会があり、埋蔵文化財包蔵地台帳との照合、ならびに現地踏査を実施した。当該計画地には周知の埋蔵文化財包蔵地である『加賀後遺跡』が所在しているため、保存協議の資料を得る目的で試掘調査を実施した。試掘調査では縄文時代の遺物包含層ならびに古墳時代の土坑等の遺構を確認した。この結果をもって工事主体者と保存協議をおこなったが、本計画は個人住宅の建設に伴うものであり、計画の変更は困難であった。開発計画では住宅造成時に土取りを行うため遺構等の損壊が免れないと判断されることから、記録保存目的の発掘調査を実施した。

第2項 遺跡の概要

小高区南部、現海岸線より約5km内陸の宮田川西側の低位段丘ならびに沖積低地に立地している遺跡で、範囲は東西約250m、南北約250mと推定されている。低位段丘は標高10m前後、低地部は標高5m前後を測る。本遺跡は加賀後貝塚を内在しており、縄文時代～平安時代の複合遺跡として遺跡台帳に登録されている。

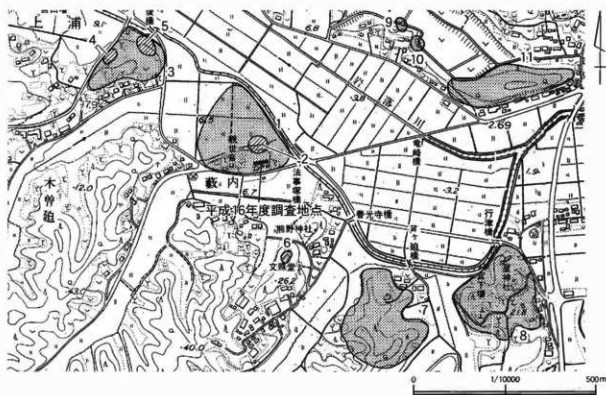


図5 加賀後遺跡位置図

本遺跡は、過去に数回の試掘調査が実施され、地表下1.4mでイボキサゴを中心とした縄文前期前半の貝層をはじめ、弥生時代～平安時代の遺物包含層が確認されている。貝層が現在の水田面下に埋没しており、小高区内では最低位のレベル（標高4m前後）に形成された貝塚である。平成11年に県営ほ場整備に伴いボーリング調査を実施し、地表下1.2mで貝層と同時期の遺物包含層を検出したほか、弥生時代・平安時代の遺物包含層が確認されている。

本遺跡の周辺には、学史上著名な縄文時代前期の貝塚である宮田貝塚を内在する宮田遺跡をはじめ、文殊堂古墳、上浦館跡、鹿島館遺跡、小泉横穴墓群、小泉古墳、山沢古墳群などが分布するが、これらの遺跡のほとんどは調査が行われておらず詳細は不明である。

第3項 調査の方法

試掘調査

試掘調査は開発予定地内に2×5mのトレンチ（23トレンチ）ならびに2×10mのトレンチ（24トレンチ）を東西方向に設定して遺構・遺物の有無を確認した。表土除去から遺構検出作業・精査作業まで人力でおこなった。トレンチ番号は平成15年のトレンチ番号の続き番号でつけた。



図6 調査状況図

試掘調査の結果、23 トレンチでは縄文時代の遺物包含層を、24 トレンチでは古墳時代の土坑等の遺構を確認した。

本調査

試掘調査の結果をもって保存協議をおこなったが、工事計画の変更は困難であることから土取りを行う計画地の全面（562.1㎡）を調査範囲とし記録保存のための発掘調査を実施した。

表土から遺構検出面に到達するまでの堆積土は、0.7㎡のバックホーを用いて除去し、それ以降の遺構検出作業や精査作業は人力で行った。遺構に伴わない遺物が出土した場合は、層位・日付を記録して取り上げた。

調査記録の作成は、35mm判カラーリバーサルフィルムで行い、適宜デジタルカメラを使用した。記録図面は、平面図は平板測量をおこない $S = 1/20 \cdot 1/40$ の縮尺率で、断面図については $S = 1/20$ の縮尺率で作成した。

第4項 調査要項と調査成果

調査要項

所在地 南相馬市小高区上浦字大畑

調査期間 平成17年7月29日～8月17日

調査面積 562.1㎡

調査担当 川田 強・佐川 久

発掘作業員 佐々木慎太郎・発田清・松木利秀

調査成果（図7）

調査区は、北西から南東に向かって後世の掘削を受けている。遺構は調査区全面にわたり確認されたが、調査区の北側中央よりやや西に掘立柱建物をはじめとする遺構が集中的に分布している。また、掘削の影響からか調査区東側では遺構の分布が希薄である。

調査区南西部では、縄文前期前葉の遺物包含層を検出した。

1 掘立柱建物・柱列

1号掘立柱建物跡（SB01、図8）

位置：本遺構は調査区の中央やや北寄りに位置する。後述する2号掘立柱建物跡・1号柱列跡とは建物敷地において重複する位置にあるが、柱掘方等の遺構の直接的な切り合い関係は認められない。平面形・規模：桁行3間×梁行1間の掘立柱建物であり、桁行は北側ならびに南側で総長7.0m、梁行の総長は西側4.2m、東側4.5mを計測する。柱間距離は桁行北側柱列で、西側から2.3m+2.3m+2.4mを測る。建物主軸は $N82^\circ E$ である。柱掘方：建物南半の大部分は後世の掘削を受けおり、最も遺存状態の良いP34は、長軸を北に向けた隅丸方形を有し、長軸81cm×短軸70cm×深さ62cmを計測する。それ以外の柱掘方は、楕円形もしくは隅丸方形を呈しており、長軸方向に統一性がなく、掘方に規格性は認められない。掘方内の堆積土

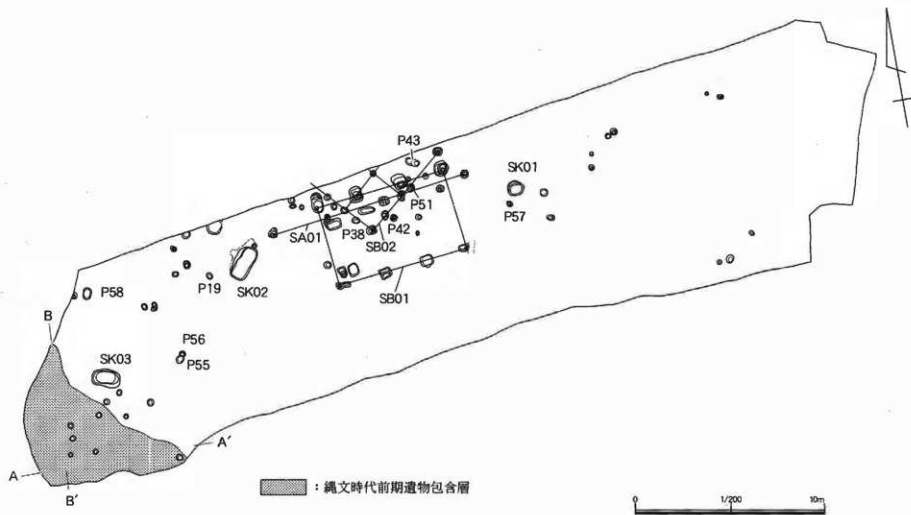
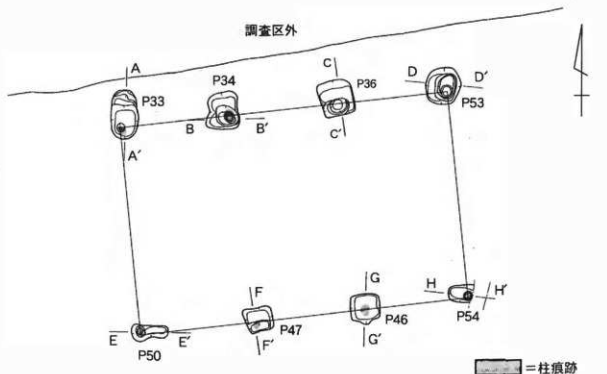


図7 調査区全体図 (S=1/200)



- P 33** (A-A' 9.5m)
- 黒色 粘液中, 締り中, 白色粘土ブロック少量, ロームブロック少量, ローム粒中量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ロームブロック主体層。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ロームブロック主体層, (3層より薄い)
 - 黒色 粘液中, 締り中, ロームブロック少量, ローム粒少量, (2層より薄い)
 - 黒色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, (5層より薄い)
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ロームブロック主体層, 黒色土ブロック少量。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ロームブロック主体層, 黒色土ブロック少量。
- P 34** (B-B' 9.6m)
- 黒褐色 粘液中, 締り中, 黄褐色粘層, ロームブロック中量, ローム粒多量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, ローム粒少量, (1層より薄い)
 - 黒色 粘液中, 締り中, ロームブロック少量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, (1層より薄い)
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, (1層より薄い)
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
- P 36** (C-C' 9.6m)
- 黒色 粘液中, 締り中, 黄褐色粘層, ロームブロック中量, ローム粒多量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, ローム粒少量, (1層より薄い)
 - 黒色 粘液中, 締り中, ロームブロック少量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, (1層より薄い)
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
- P 53** (D-D' 9.5m)
- 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック・小石散在, レナ多量。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, 小石散在, ローム粒中量, ロームブロック多量。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・小石散在, 大形レナ
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量, 大形レナ
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ロームブロック少量, ローム粒多量。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ローム粒少量。
- P 50** (E-E' 9.5m)
- 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・白色粘土ブロック少量。
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒少量, 白色粘土ブロック少量。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ロームブロック主体層, 黄褐色ブロック少量, (シルト質)
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, (シルト質)
- P 47** (F-F' 9.3m)
- 黒色 粘液中, 締り中, 黒土粒・灰白色粘土ブロック少量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, ロームブロック少量, 灰白色粘土ブロック多量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, 灰白色粘土ブロック少量, ロームブロック中量, ローム粒多量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, ロームブロック・粘土散在, ローム粒少量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, ロームブロック少量, (1層より薄い)
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
 - 黒褐色 粘液中, 締り中, ローム粒・黒色土ブロック少量。
- P 46** (G-G' 9.3m)
- 黒色 粘液中, 締り中, ローム粒・ロームブロック・白色粘土ブロック少量。
 - 黒色 粘液中, 締り中, 白色粘土ブロック少量, ローム粒・ロームブロック中量。
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, ロームブロック主体層, 白色粘土ブロック少量。
- P 54** (H-H' 9.3m)
- 黒色 粘液中, 締り中,
 - 黄褐色 粘液中, 締り中, 灰色シルトブロック多量。

図8 1号掘立柱建物跡実測図 (S=1/80)

は大きく柱埋土と柱痕跡に分けられる。柱埋土は黒色から黒褐色土を基調とし、地山のロームブロックが多量に混入し、版築状の互層堆積を示す。柱痕跡は、P 33・34・46・47・50・54で確認された。黒色土を主体とし、直径20cm前後の円形を呈する。また、P 34では拳大から人頭大のレキが充填されており、これらは根固石の可能性が高い。遺物：P 50を除いたすべての柱掘方から出土している。その大部分は古墳時代の土師器の破片であるが、図化するまでに至らない小破片であり、本建物建設時に混入した可能性が高い。最も新しい遺物では、P 46の柱埋土から粗いタテハケを施した甕が、P 53からは須恵器を模倣した土師器杯片が出土している。これらはロクロ未使用で特に杯の内面には黒色処理が見られないことから、内面の黒色処理が一般化する栗田式以前の特徴を有し、住社式並行期のものと考えられる。備考：本遺構は桁行3間に対して梁行は1間で構成されており、掘立柱建物跡であると断定することはできないが、柱筋の通りが良いこと、柱掘方には柱痕跡が認められ、また根固石を伴うものが認められたことなどから掘立柱建物跡として取り扱っておきたい。本建物の所属時期は柱掘方から出土した遺物から、住社式期以降の年代が与えられる。

2号掘立柱建物跡（SB 02 図9）

位置：本遺構は調査区の中央やや北寄りに位置する。先述したように1号掘立柱建物跡・1号柱列跡と建物敷地において重複関係にあるが、柱掘方等の遺構との直接的な切り合い関係は認められない。平面形・規模：平面形が調査区外に展開するので全体の構造は不明であるが、桁行2間×梁行1間以上の側柱建物跡である。桁行南側柱列では総長5.4m以上、梁行西側柱列では総長1.8m以上を計測する。柱間距離は桁行南側柱列で、西から2.4m+3.0mを測り、梁行は1.8mを計測する。建物主軸はN41°Eである。柱掘方：長軸方向に統一性はなく、平面形は隅丸方形ならびに楕円形を呈しており、掘方に規格性は認められない。最も遺存状態が良いP 41は、長軸方向を東に向けた隅丸方形を有し、長軸50cm×短軸44cm×深さ36cmを測る。1号掘立柱建物と比較すると柱穴は小型で、本建物跡を構成する柱穴同士を比較してもP 37・41・52よりP 9・39は規模が小さい。特にP 9は他の柱穴より小型で浅いことから床束の可能性もある。掘方内の堆積土は大きく柱埋土と柱痕跡に分けられる。柱埋土は黒色土を基調としており、地山であるロームブロックが多量に混入し、版築状の互層堆積を示す。柱痕跡はP 37・39で確認されている。黒色土を主体とし、直径は20cm前後の円形から楕円形を呈する。遺物：P 39を除くすべての柱掘方から出土している。その大部分は古墳時代の土師器の破片であるが、図化するまでには至らない小破片であり、本建物建設時に混入した可能性が高い。最も新しい遺物は、P 37の柱埋土から内面（両面？）黒色処理が施された土師器が、P 52から外面に段を有し内面に黒色処理が認められる土師器の杯の破片が出土している。これらは内面が黒色処理されているが、ロクロ未使用で外面に明瞭な段を有していることから、住社式並行期のものと考えられる。備考：本建物の所属時期は柱掘方から出土した遺物から、住社式期以降の年代が与えられる。

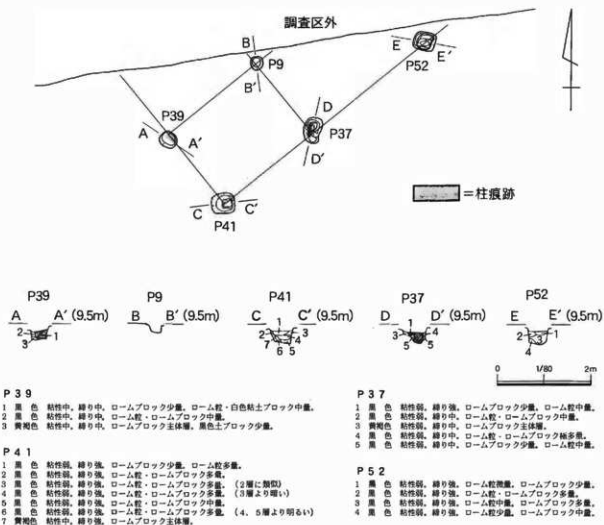


図9 2号掘立柱建物跡実測図 (S=1/80)

1号柱列 (SA 01. 図10)

位置:調査区中央北部に位置し、1号掘立柱建物の主軸に平行するように構築されている。1・2号掘立柱建物と建物敷地において重複関係にあるが、柱掘方等の遺構との直接的な切り合い関係は認められない。平面形・規模:3間で総長9.5mを測る。柱間距離は西から3.2m+3.0m+3.3mを計測する。主軸はN81°Eである。柱掘方:長軸方向に統一性はなく、平面形は円形ならびに楕円形を呈しており、柱掘方に規格性は認められない。P44は、円形を有し、長軸40cm×短軸36cm×深さ28cmを測る。掘方内の堆積土は大きく柱埋土と柱痕跡に分けられる。柱埋土は黒色土を基調としており、地山であるロームブロックが多く混入する。柱痕跡はP35・44で確認されている。黒色土を主体とし、直径20cm前後の円形を呈する。また、P44では拳大～人頭大のレキが充填されており、これらは根固石の可能性が高い。遺物:すべての柱穴から出土している。その大部分は古墳時代の土師器の破片であるが、図化するまでに至らない小破片であり、本柱列構築時に混入した可能性が高い。P35から外面に段を有し内面に黒色処理が認められる土師器の杯と思われる破片が出土している。この破片は内面の黒色処

理が一般化する栗園式並行期のもと考えられる。備考：根固石を伴う柱掘方が認められることから、調査区外に柱掘方が展開している建物跡の可能性が考えられるが、柱筋の通りが良くないことから柱列として取り扱っておきたい。本柱列の所属時期は柱掘方から出土した遺物から、栗園式期以降の年代が与えられる。

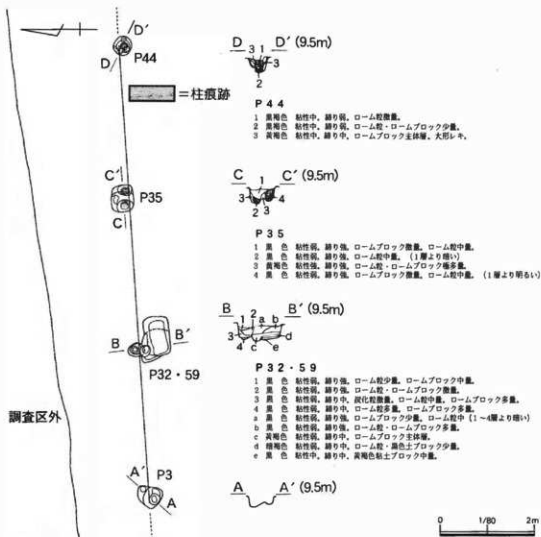


図10 1号柱列跡実測図 (S=1/80)

2 柱穴 (図 11)

P 3 8

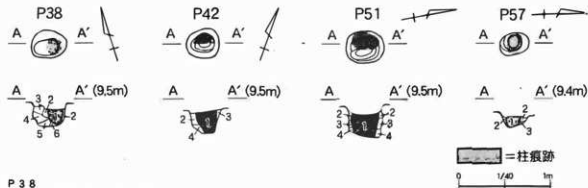
位置：調査区中央よりやや北西部に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。柱掘方：楕円形を呈し、長軸方向はN70°Wである。長軸38cm×短軸30cm×深さ26cmを計測する。掘方内の堆積土は大きく柱埋土と柱痕跡に分けられる。柱埋土は黒褐色土を基調としており、地山であるロームブロックが多量に混入し、版築状の互層堆積を示す。柱痕跡は黒色土を主体とし、直径28cmの円形を呈する。遺物：土師器等の土器が数点出土したが、図化するまでには至らない小破片であり、本柱掘方構築時に混入した可能性が高い。備考：土師器の破片が出土していることから、所属時期は古墳時代以降の年代が与えられる。

P 4 2

位置：調査区中央よりやや北西部に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。柱掘方：楕円形を呈し、長軸方向はN61°Eである。長軸37cm×短軸32cm×深さ27cmを計測する。掘方内の堆積土は大きく柱埋土と柱痕跡に分けられる。柱埋土は黒褐色土を基調としており、地山であるロームブロックが多量に混入し、版築状の互層堆積を示す。柱痕跡は黒色土を主体とし、直径34cmの円形～楕円形を呈する。遺物：土師器等が出土しているが、図化するまでには至らない小破片であり、本柱掘方構築時に混入した可能性が高い。最も新しい時期の遺物では、外面に段を有し内外面を赤彩した土師器の杯の破片が出土している。この破片は、ロクロ未使用で内面には黒色処理が見られないことから、内面の黒色処理が一般化する栗田式以前の特徴を有し、住社式併行期のもと考えられる。備考：本遺構所属時期は出土遺物から住社式以降の年代が与えられる。

P 5 1

位置：調査区中央北部に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。柱掘方：楕円形を呈し長軸方向はN11°Eである。長軸42cm×短軸35cm×深さ37cmを計測する。掘方内の堆積土は大きく柱埋土と柱痕跡に分けられる。柱埋土は黒褐色土を基調としており、地山であるロー



P 3 8

- 1 黒褐色 粘性弱、締り弱、ローム粒少量。
- 2 暗褐色 粘性中、締り中、ロームブロック少量。
- 3 黄褐色 粘性中、締り中、ローム粒・ロームブロック極少量。
- 4 暗色 粘性中、締り中、ロームブロック中量、ローム粒少量。
- 5 黄褐色 粘性弱、締り弱、ロームブロック主体層。

P 4 2

- 1 黒色 粘性弱、締り中、炭化粒少量、ローム粒・ロームブロック中量。
- 2 黄褐色 粘性弱、締り強、ローム粒中量、ロームブロック多量。
- 3 黄褐色 粘性弱、締り強、炭土粒少量、ローム粒少量、ロームブロック多量。(2層に亘り)
- 4 黄褐色 粘性弱、締り強、ローム粒中量、ロームブロック多量。(2層より中々強)

P 5 1

- 1 黄褐色 粘性中、締り中、ロームブロック少量、ローム粒少量。
- 2 黄褐色 粘性中、締り中、ローム粒・ロームブロック少量。
- 3 黄褐色 粘性中、締り中、ローム粒少量、ロームブロック多量。
- 4 黄褐色 粘性中、締り中、ロームブロック主体層。

P 5 7

- 1 黄褐色 粘性中、締り中、小石少量、ローム粒少量。
- 2 暗色 粘性中、締り中、ロームブロック少量、ローム中量。
- 3 暗褐色 粘性中、締り中、ローム粒少量。

図11 柱穴実測図 (S=1/40)

ムブロックが多量に混入し、版築状の互層堆積を示す。柱痕跡は黒色土を主体とし、直径45cmの楕円形を呈する。遺物：土師器等の土器が数点出土したが、図化するまでには至らない小破片であり、本柱掘方構築時に混入した可能性が高い。備考：土師器の破片が出土していることから、所属時期は古墳時代以降の年代が与えられる。

P57

位置：調査区中央よりやや北東部位置する。他の遺構との切り合い関係はない。柱掘方：楕円形を呈し長軸方向はN19°Wである。長軸33cm×短軸24cm×深さ17cm計測する。掘方内の堆積土は大きく柱埋土と柱痕跡に分けられる。柱埋土は黒褐色土を基調としており、地山であるロームブロックが多量に混入し、版築状の互層堆積を示す。柱痕跡は黒色土を主体とし、直径35cmの楕円形を呈する。遺物：遺物は出土しなかった。備考：所属時期は不明である。

3 土坑・ピット (図12)

SK01

位置：調査区中央よりやや東部に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。形状・規模：楕円形を呈し長軸方向はN86°Eである。長軸85cm×短軸75cm×深さ28cmを計測する。覆土：黒色土を基調としており、レンズ状の堆積が認められる。ℓ1～4のいずれの層も白色粘土ブロックならびに地山であるロームブロックの混入が見られる。ℓ2上面では土器が敷き詰められたような出土状況が確認されている。遺物：出土遺物は図12に示した。1は壺で緩やかに外反する複合口縁である。口縁部は内外面に横ナデが認められる。頸部の外面はハケメ後横ナデ調整、内面はミガキが施されている。外面は赤彩されている。2～4は甕の体部である。2は体部中位に最大径を持ち頸部で括れる。外面はハケメ後にヘラ削りで調整している。内面は全体的にヘラ削りが認められ、その後上半部ではナデならびに押捺が施されている。3は球状を呈する器形と思われる。外面はハケメ調整が見られ、下半部はヘラ削り後ナデが施されている。内面はヘラ削りで調整されている。4は球状の体部である。外面はハケメ、内面はヘラ削りが認められる。器形・調整等の特徴から、1～4は塩釜式期のものと考えられる。備考：出土遺物から所属時期は塩釜式期の古墳時代前期と考えられる。

SK02

位置：調査区北西部に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。形状・規模：隅丸長方形を呈する。長軸方向はN40°Eであり、SB02の長軸方向と方位がほぼ一致する。長軸184cm×短軸100cm×深さ30cmを計測する。覆土：黒褐色土を基調としている。ℓ1～6層すべてにローム粒・ロームブロックが多量に混入していることから、人為的な埋土と考えられる。特に底面直上のℓ6は貼ったような感じでフラットな状態で確認されている。ℓ1～6層すべてにテフラが混入している。遺物：土師器を中心に非常に多くの遺物が出土しているが、図示できたのは7点だけである(図14)。1は内面が黒色処理された杯で、体部外面に明瞭な段を持つ。底部は丸底状を呈している。外面は段を境として上部は横ナデ、下部はヘラ削りが認められる。内面はヘラ削り後ミガキを施している。2・3は甕である。2は口縁が緩やかに

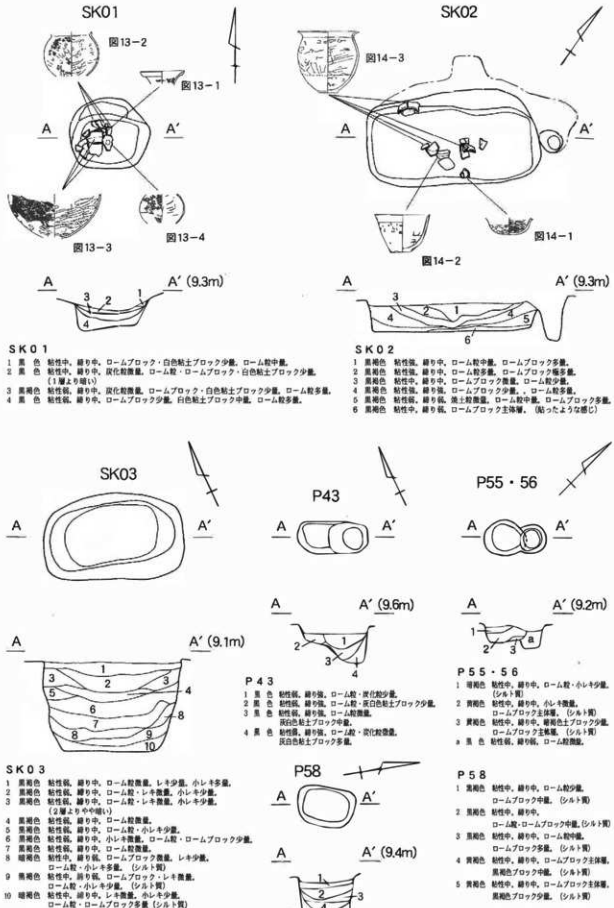


図12 土坑・ピット実測図 (S=1/40)

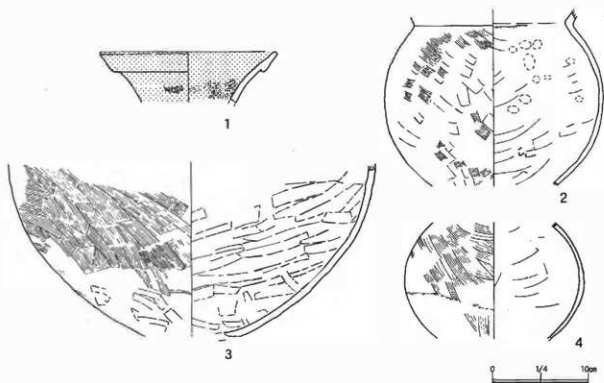


図13 1号土坑出土遺物

外半し、頸部に段を有する甕である。口縁部外面は横ナデが見られ、体部外面にはハケメ調整が認められる。内面はヘラ削り後ナデが施されている。3は体部上位に最大径をもち、頸部で括れ、口縁が外反する甕である。頸部の段は不明瞭である。外面はヘラ削りが認められ、体部の上半においては横ナデ調整が施されている。口縁内面は横ナデ、体部内面はヘラ削り後ナデで調整されている。底部にはヘラナデが認められる。4・5は甕の底部と思われる。4は内外面ともナデ調整がされ、底部には木葉痕が見られる。5は底部に木葉痕が認められるが、ナデ調整がおこなわれているため、明確ではない。これらの遺物は、器形・調整等の特徴から栗園式期のものと考えられる。6は石皿である。欠損が激しく、一面のみ使用痕が確認できる。石材は石英斑岩である。7は磨石で、全面に使用痕が確認できる。石材は安山岩である。備考：出土遺物から所属時期は栗園式期と考えられる。

SK03

位置：調査区南西部に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。形状・規模：隅丸方形を呈し長軸方向はN76°Wである。長軸150cm×短軸90cm×深さ94cmを計測する。覆土：黒褐色土を基調としてレンズ状の堆積が認められる。小レキ・レキを比較的多く含む。下位のℓ8～10はシルト質である。遺物：縄文前期前半の土器が出土している（図22-3）。口縁部にC字形の爪形文が配され、その下部には鋸歯状の沈線が施されている。備考：平面形、断面形、深さから落とし穴の可能性が考えられる。出土遺物から所属時期は縄文前期前半以降の年代が与えられる。

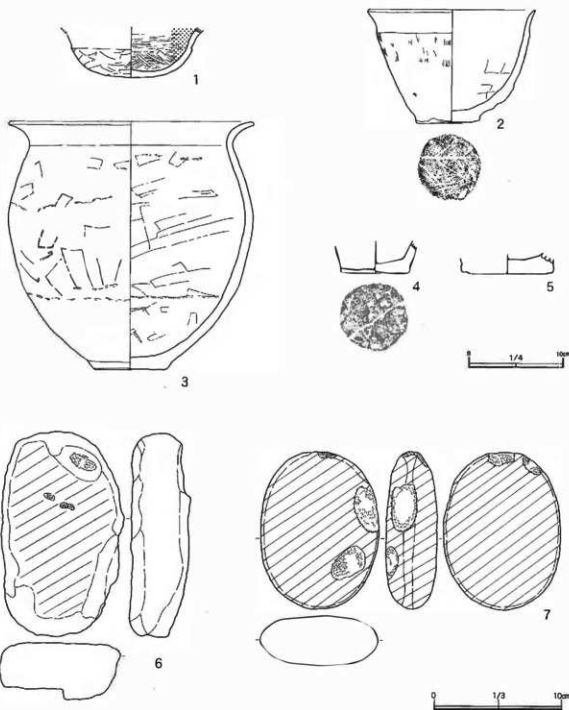


図14 2号土坑出土遺物

P 4 3

位置：調査区中央北部に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。形状・規模：兩丸方形を呈し長軸方向はN64°Wである。長軸75cm×短軸35cm×深さ40cmを計測する。覆土：黒褐色土を基調としてレンズ状の堆積をしている。遺物：土師器等が出土しているが、図化するまでに至らない小破片であり、流れ込みの可能性が高い。最も新しい時期の遺物では、焼成の状態が良く、黒色処理・ミガキ等が施されておらず、ロクろ整形・回転糸切りが認められる

杯の破片が出土している。この杯の破片は10世紀のものと考えられる。備考：所属時期は出土遺物から10世紀以降の年代が与えられる。

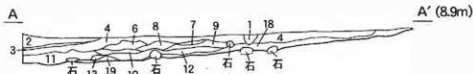
P 55・56

位置：調査区南西部に位置する。P 55がP 56を切っている。形状・規模：P 55は楕円形で、P 56は円形あるいは楕円形を呈すると思われる。P 55の長軸方向はN39°Eである。P 55は長軸45cm×短軸38cm×深さ18cmを測り、P 56は長軸28cm以上×短軸30cm×深さ25cmを計測する。覆土：P 55は黄褐色～暗褐色土を基調としており、いずれもシルト質である。P 56には単一の黒色土が堆積している。遺物：数点の土師器等が出土したが、図化するまでには至らない小破片であり、流れ込みの可能性が高い。備考：土師器の破片が出土していることから、所属時期は古墳時代以降の年代が与えられる。

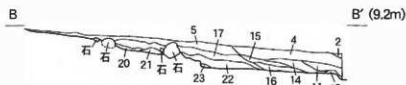
P 58

位置：調査区北西部に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。形状・規模：隅丸方形を呈し長軸方向はN15°Eである。長軸61cm×短軸43cm×深さ42cmを計測する。覆土：黒褐色土を基調としてレンス状の堆積が認められる。下位には黄褐色土が堆積している。ℓ 1～5のいずれの層もシルト質である。遺物：遺物は出土しなかった。備考：所属時期は不明である。

北壁断面図



東壁断面図



北壁・東壁セクション

- | | |
|--|--|
| <p>1 黄褐色土 粘性中、締まり中、ローム散、焼土散層、小石・レキ少量、黒色土ブロック多量。</p> <p>2 暗褐色土 粘性中、締まり中、ロームブロック・焼土散層、ローム散少量、炭化粒・小石中量。</p> <p>3 暗褐色土 粘性中、締まり中、ロームブロック・焼土散層、ローム散・小石少量、炭化粒多量。</p> <p>4 暗褐色土 粘性中、締まり中、焼土散層、ロームブロック・レキ少量、ローム散・炭化粒中量、小石多量。</p> <p>5 暗褐色土 粘性中、締まり中、ローム散・炭化粒・焼土散・レキ少量・小石多量。</p> <p>6 暗褐色土 粘性中、締まり中、焼土散・小石少量、炭化粒中量、ローム散多量。(4層よりやや明るい)</p> <p>7 暗褐色土 粘性中、締まり中、ロームブロック・焼土散・小石散層、ローム散・炭化粒少量。(4層より明るい)</p> <p>8 暗褐色土 粘性中、締まり強、焼土散層、小石少量、ローム散・炭化粒多量。(4層より暗い)</p> <p>9 暗褐色土 粘性中、締まり中、焼土散・レキ散層、ローム散・炭化粒・小石少量。(4層よりやや暗い)</p> <p>10 暗褐色土 粘性中、締まり中、焼土散・小石少量、ローム散中量、炭化粒多量。(7層よりやや明るい)</p> <p>11 暗褐色土 粘性中、締まり強、ロームブロック散層、ローム散・レキ少量、炭化粒・小石中量。(4層より暗い)</p> <p>12 黄褐色土 粘性中、締まり強、炭化粒散層、ローム散少量、レキ中量、小石多量。</p> <p>13 暗褐色土 粘性中、締まり強、炭化粒・焼土散層、小石少量、ローム散・ロームブロック多量。</p> <p>14 暗褐色土 粘性中、締まり中、レキ散層、ローム散少量、炭化粒中量、小石多量。(15・16層より暗い)</p> <p>15 暗褐色土 粘性中、締まり中、炭化粒散層、ローム散少量、小石多量。</p> <p>16 暗褐色土 粘性中、締まり中、ロームブロック・炭化粒散層、ローム散少量、小石多量。(16層より明るい)</p> | <p>17 暗褐色土 粘性中、締まり中、ロームブロック・炭化粒散層、ローム散少量、レキ中量、小石多量。(8層より暗い)</p> <p>18 暗褐色土 粘性中、締まり強、炭化粒散層、ローム散少量、レキ中量、小石多量。(他層より明るい)</p> <p>19 暗褐色土 粘性中、締まり強、ローム散少量、小石多量。(他層より明るい)</p> <p>20 暗褐色土 粘性中、締まり強、ローム散層、小石多量。(10層より明るい)</p> <p>21 暗褐色土 粘性中、締まり強、ローム散層、レキ少量、小石多量。(10層より明るい)</p> <p>22 暗褐色土 粘性中、締まり中、ロームブロック・焼土散層、ローム散・レキ少量、小石多量。(10層より明るい)</p> <p>23 暗褐色土 粘性中、締まり中、ローム散層、小石少量。</p> |
|--|--|



図15 遺物包含層断面図 (S=1/60)

4 遺物包含層

調査区南西部で検出されている。堆積土は暗褐色・黒褐色土を基調としている。ローム・炭化物・焼土等が小ブロック状に混入し、小石やレキを比較的多く含む。東西 7.4 m、南北 6.8 m の範囲に認められ、最大厚は 0.6 m を測る。これら包含層の下位には、地山である砂質ロームの堆積が認められ、南西に向かって緩やかな傾斜をしているが、この傾斜に合わせるように南西方向に向かって包含層の堆積が厚くなっている。堆積状況から遺構構築などに伴う人為的な痕跡は認められず、自然堆積と考えられる。遺物は多量に出土しており、縄文前期前半の土器が主体である。

5 出土遺物

図 13・14 で示した遺構から出土した遺物を除いた、遺構・遺物包含層・表土から出土した遺物について述べることにする。

(1) 縄文・弥生土器

1. 土器分類

出土した縄文土器、弥生土器を以下のように分類した。

I 群土器 縄文時代早期の条痕文系土器群である。併行すると考えられる土器群も含めた。

II 群土器 縄文時代前期前半の織維を含む土器群である。

1 類 文様をもつもの。

a 種 縄圧痕文が施されるもの。頸部隆帯上及び屈曲部に刺突が施されるものがある。

縄圧痕文が施されないが、頸部隆帯上及び屈曲部に刺突が施されるものも含めた。

b 種 貝殻腹縁文が施されるもの。

c 種 刺突文、平行沈線、コンパス文が施されるもの。刺突は半截竹管やヘラ状の工具等で施される。施文部位により、さらに細別した。

c 1 種 口縁部にのみ施されるもの。

c 2 種 口頸部の幅広い範囲、胴部下部、底面または全面に文様を描くもの。

c 3 種 口縁上端にのみ刺突、押捺が施されるもの。

d 種 粘土瘤（点状文様）が施されるもの。

e 種 地文の磨り消しや縄文を山形状等に施し、文様を描くもの。

2 類 主に地文のみ施されるもの。

a 種 単斜縄文。

b 種 羽状縄文。

b 1 種 結束第 1 種の羽状縄文。

b 2 種 非結束羽状縄文。

c 種 末端還付（ループ）文が施されるもの。

d 種 その他。

III 群土器 弥生時代中期の土器群である。

2. 遺物包含層出土土器 (図 16～21)

縄文時代の遺物包含層及びその上面から出土した土器を一括した。

I 群土器 (図 16 - 1～14)

条痕文系の土器群である。1～4・6・7は、鶴ヶ島台式に相当する。1・2は同一個体である。微隆起線の交点に円形の刺突が施され、区画内に半截竹管による刺突が施される。4も微隆起線による施文である。3・6・7は沈線区画内に刺突が施されている。

9～11は茅山上層式と考えられる。9は斜行する沈線上に1列の刺突列が施されている。10は半截竹管による格子状文、11は縦隆帯によって区画された口縁部破片である。

12は外面に絡糸体圧痕、内面に条痕が施されている。常世Ⅱ式に相当する。

13・14はI群土器に相当する縄文、撚糸文が施されるものである。13は外面に撚糸文、内面に条痕が施される。14は口縁に縦方向に0段多条が施文される

II 群土器 (図 16 - 15～32、図 17 - 21)

縄文前期前半の繊維土器である。遺物包含層出土土器群の主体を占める土器群である。文様の有無によって2類に大別し、その特徴によってそれぞれ細別した。

II 群 1 類 文様をもつものである。

1 類 a 種 (図 16 - 15～20・22・23)

17～20は縄圧痕文によって文様が施されるものである。15～17・19は頸部隆起部に刺突が施される。19は円形のモチーフが描かれている。20は八字状の縄圧痕文により蕨手状のモチーフが描かれ、空白部に短沈線が充填されている。22は口縁部の刺突列下端の頸部屈曲部に縦長の刺突、23は棒状工具による刺突が施されている。

1 類 b 種 (図 16 - 21)

21は胴部下半に二枚貝の貝殻腹縁文が羽状に施される。

1 類 c 1 種 (図 16 - 24～25)

24・25は口縁部に半截竹管による刺突列が施されるものである。

1 類 c 2 種 (図 16 - 26～33、図 17 - 1～3・8・13・14、図 18 - 1～14、図 19 - 1・2)

刺突文等が幅広く施されるものである。図 17 - 1 は、C 字形爪形文による縦区画内に菱形文が描かれ、交点には円形竹管文が施される。胴部下半から口縁にかけて、緩やかに外反している。同図 2 は平行沈線区内に刺突を施し、横 S 字状に文様が展開される。胴部中位が内湾気味にふくらみ、頸部からゆるやかに外反する器形である。同図 3 は半截竹管による刺突列を胴部全面に施し、刺突列内に波状コンパス文を挿入している。底部にも同様の刺突列が同心円状に施される。底部から直線的に立ち上がる器形である。同図 8 は、下端にのみ地文上に C 字形爪形文が施されるものである。

同図 13・14 は底部に刺突列による文様が描かれる。14 はやや丸底状の形態である。

図 16 - 26～33 は 2 列の刺突列によって文様が施される。26～28・33 は地文が無い口頸部を区画し、山形状、鋸歯状のモチーフが描かれる。29・30 は円形もしくは蕨手状のモチーフが描かれ、29 はその中心に円形竹管文が施される。

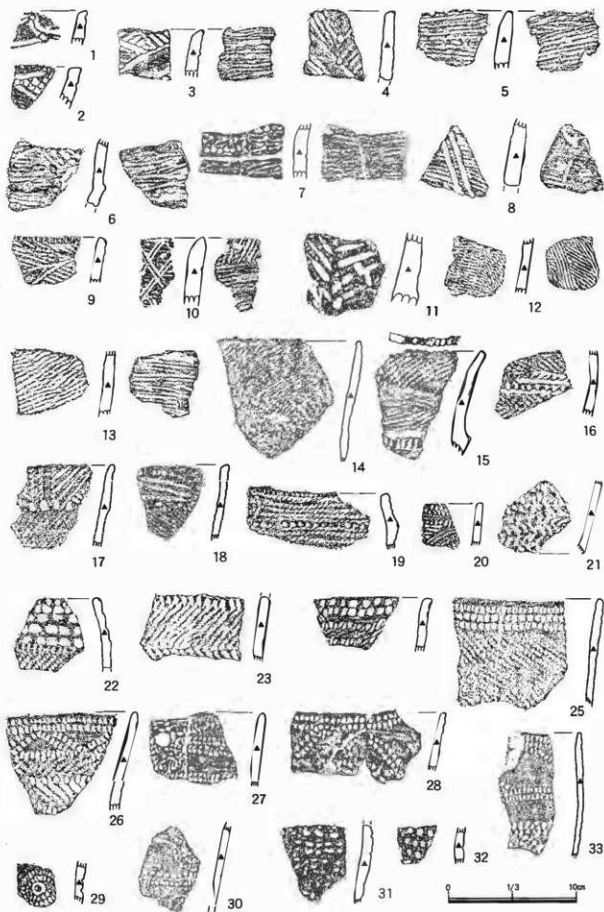


図16 包含層出土土器① (S=1/3)

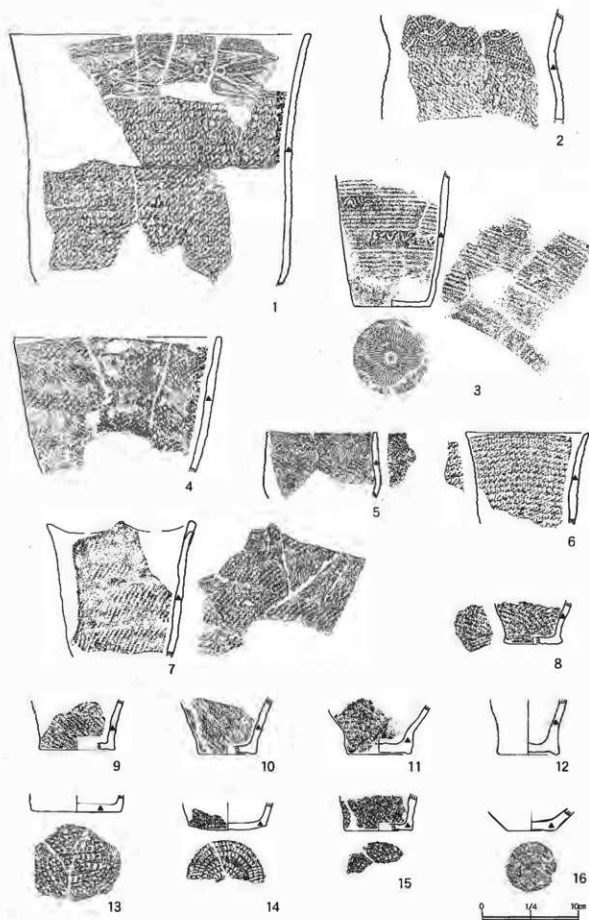


図17 包含層出土土器② (S=1/4)

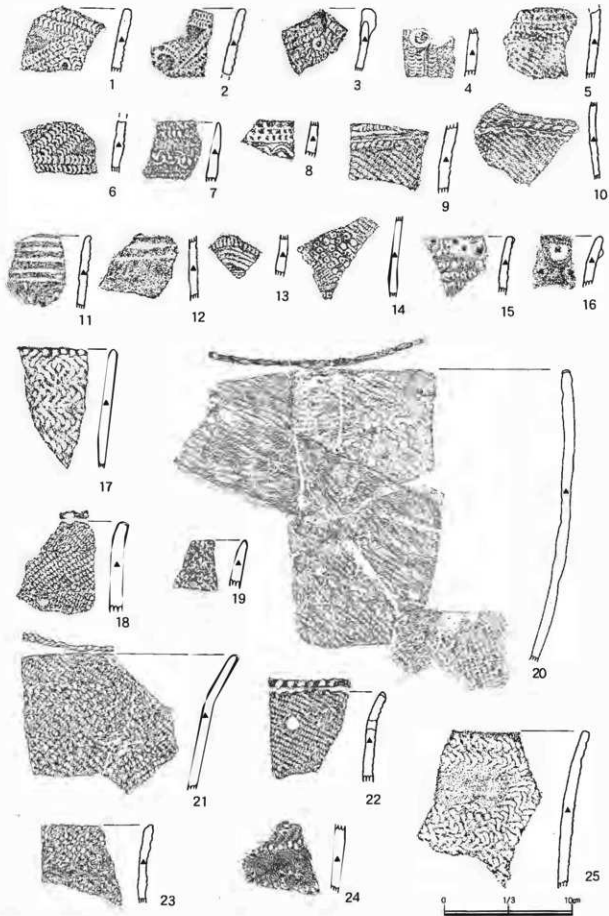


図18 包含層出土土器③ (S=1/3)

図18-1~6はC字形爪形文で文様を描くものである。1~3は波状口縁である。3は隆起した波頂部から円形竹管文を囲うようなU字形の爪形文列が認められる。

同図7・8はC字形爪形文とともにコンパス文が、同図9は平行沈線間にC字形爪形文が描かれる。同図10は頸部地文上にコンパス文が区画文として描かれるものである。

同図11・12は横位平行沈線文が、同図13は口縁に縦短沈線を施し、波状口縁に沿う平行沈線が描かれる。同図14は地文上に円形竹管文列を斜位に施している。

図19-1・2は同一個体で、2個1対の小突起に円形の刺突が施されている。

1類c 3種 (図18-17~22)

口縁上端にのみ刺突、押捺が認められるものである。半截竹管によるもの(17)、棒状工具によるもの(18)、縦長の刺突によるもの(19)、指頭によるもの(20)、縄痕によるもの(21・22)が認められる。

1類d種 (図18-15・16)

粘土瘤列が口縁部に帯状に施されるものである。16は2列の瘤が対角状に認められる。

1類e種 (図18-23~25)

23・24は横位に地文が磨り消されるものである。25は結束羽状縄文の結束部のみを施したものであり、山形状のモチーフを描くものと考えられる。

Ⅱ群2類 主に地文のみが施されるものである。

2類a種 (図17-7・10・15・16、図19-3、図20-13~24、図21-3~6)

単斜縄文である。図17-7は、波状口縁で、波頂部に三角形の小突起がある。胴部下位から直線的に開く器形である。同図10・15・16はやや上げ底状の底部で、15・16は底部にも施文されている。図19-3は口縁に小突起が認められる。図20-3~6は複節の斜縄文である。

2類b 1種 (図17-5、図19-4~7)

結束第1種の羽状縄文である。1指頭幅の施文幅が多い。図17-5は、小形の深鉢で、胴部下位で屈曲し、すばまる器形である。図19-4は波状口縁で口縁に沿って斜位に施文されている。

2類b 2種 (図17-4・9、図19-8~23)

非結束の羽状縄文である。1指頭幅で施されるものほか、幅広のものも認められる(図17-4)。0段多条のものが多い。図17-4はやや内湾気味に開く器形を呈するものである。同図9はやや上げ底状の底部を呈する。図19-9は菱形に施文されるものである。

2類c種 (図17-6、図20-1~12)

末端還付(ループ)文が施されるものである。1指頭幅の施文幅が多い。図17-6のように還付部のみを全面に施すものと図20-5のように糸が明瞭に認められるものがある。図17-6の口縁は緩やかに外反する。図20-1は然りがやや弱い還付部のみを施文である。同図2・11・12は羽状に施文している。

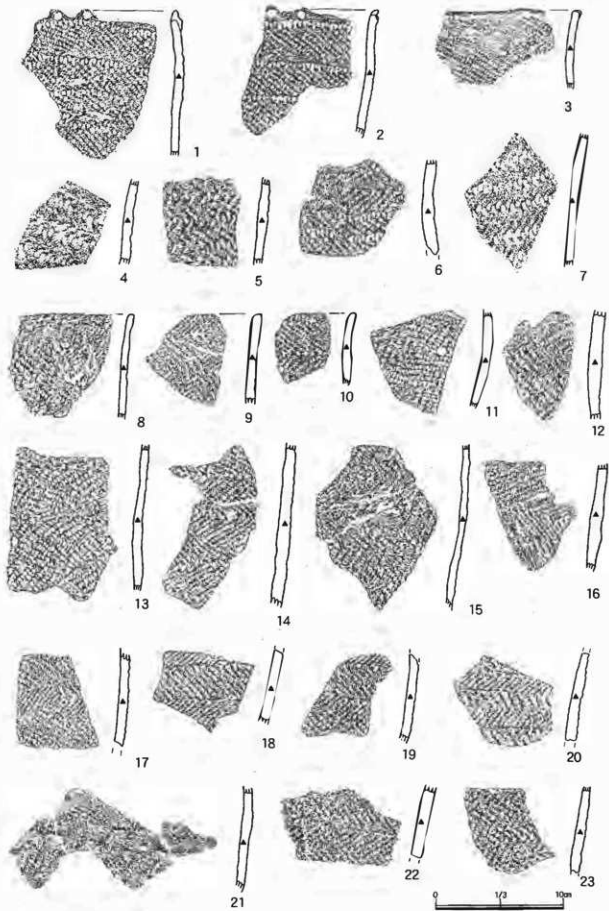


図19 包含層出土土器④

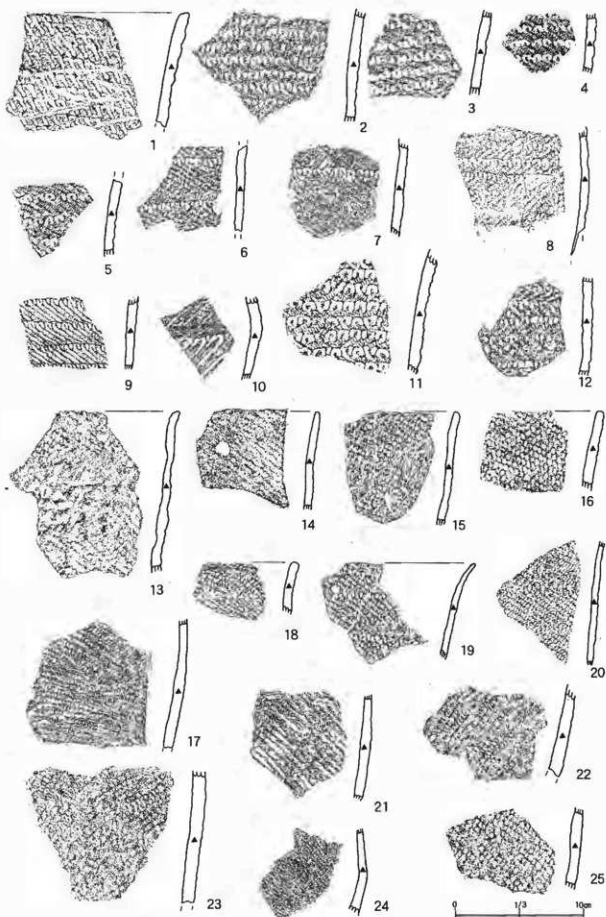


図20 包含層出土土器⑤ (S=1/3)

2類d種(図17-12、図21-1・2・7・8)

その他のものである。図17-12はナデ調整の上げ底の底部である。図21-1・2は異節斜縄文、9は無文である。7・8は単斜縄文が摩滅したものと考えられる。

3. 遺物包含層以外出土の縄文・弥生土器(図22)

遺物包含層以外から出土した縄文土器、弥生土器を一括した。

① 縄文土器

I群

1は口縁上端に縄文が、外面に微隆起線が施文される。内面には貝殻屑圧痕文が認められる。野島式と考えられる。2は、隆帯に沿う上下1列の刺突が施されている。

II群1類

1類c1種(4)

口縁に3列の刺突列が施される。

1類c2種(3・5)

3は、口縁にC字形爪形文が施され、山形(鋸歯状)の沈線文が施される。4は口頸部C字形爪形文による円形(蕨手状)の文様が描かれる。地文はループ文である。

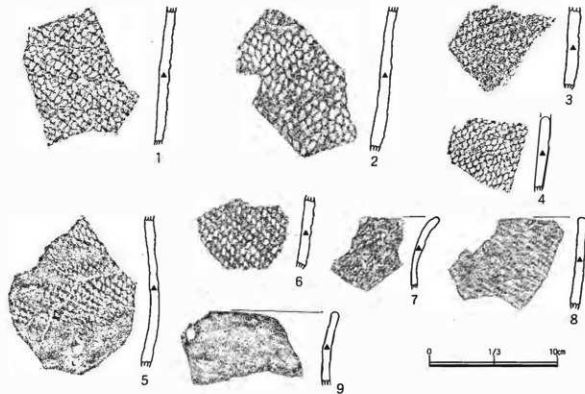


図21 包含層出土土器⑥ (S=1/3)

② 弥生土器 (6~11)

Ⅲ群に分類した土器群である。6は弧状の沈線により区画した摩消縄文が認められる鉢である。7も内外面に沈線区画の摩消縄文が認められる。これらは、椀形皿式に相当する。

8は燃糸文が施される壺口縁、9~11は附加条1種が施されるものである。中期の土器群と考えられる。

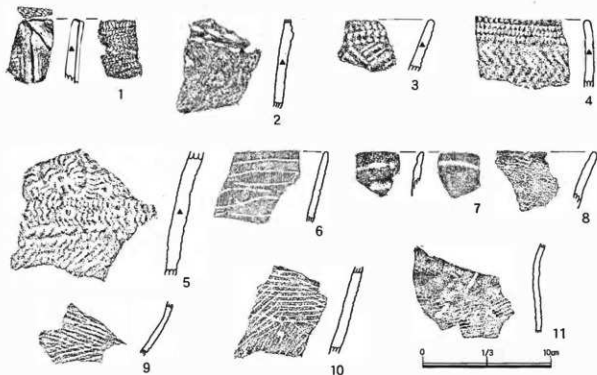


図22 遺物包含層以外出土遺物 (S=1/3)

(2) 土製品 (図23)

遺物包含層から土製品が1点出土している。大部分は欠損している。残存している調整面は左下部のみで、端部は丸く調整されている。特に文様は認められず、表面はナデで調整している。胎土には繊維を多く含む。相伴した縄文前期前半の土器の胎土に類似していることから、縄文前期前半所産の土製品と推定される。小高区内の北原貝塚遺跡群から出土した縄文前期前半の板状土偶と比較すると、厚さ・調整等類似している点が認められることから、板状土偶の可能性も考えられる。

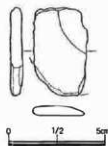


図23 遺物包含層出土土製品 (S=1/2)

(3) 石器 (図24-1、2)

遺物包含層から出土した石器は、土器量と比較すると少なく、図示できたのは2点のみである。2点とも縦形石匙であり、つまみ部が明確に作りだされている。また、両面に剝離痕が認められるが、特に片側の面が丁寧に剝離調整されている。石材はいずれも頁岩である。

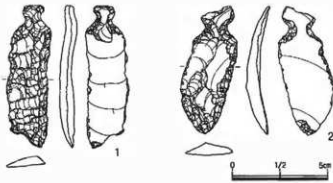


図24 遺物包含層出土石器 (S=1/2)

(4) 古墳時代以降の出土遺物

1. 遺構外出土遺物 (図25)

表土から出土した遺物をまとめた。1はやや内湾する台付甕の台部である。外面ならびに胴部内面はナデ調整が、台部内側の上半にはヘラ削り、下半にはナデ調整が認められる。2は高杯の脚部と考えられる。外面ヘラ削り後ナデ、内面はナデ調整が施されている。3は体部中央に最大径をもつ甕である。外面はハケメ後ナデ、内面はヘラ削り後ナデで調整されている。4は丸底状を呈し、底部中央はやや上げ底の杯である。外面はヘラ削り後ミガキ、内面はヘラ削りが施されている。5は円窓が作り出されている器台の脚部である。外面はミガキ・赤彩が施され、内面はナデ調整されている。杯部内面は粗いヘラ削り後にナデ調整がおこなわれている。6は体部中央に最大径をもち、口縁が緩やかに外反する甕である。内外面ともに口縁部には横ナデ調整が施され、体部の内外面にはヘラ削りが認められる。7は甕の底部と思われる。底部にはヘラ削りが施されている。8は多孔式の甎の底部である。外面はハケメ後ナデが施されて

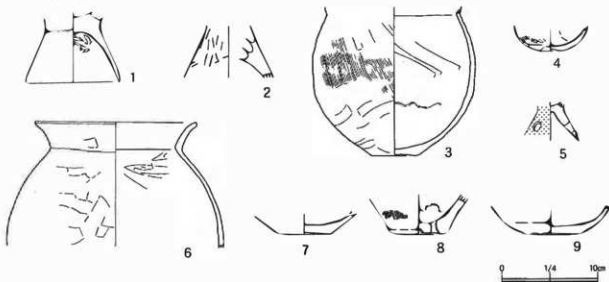


図25 遺構外出土遺物

おり、底部付近では稜線が認められる。内面には輪積み痕が見られる。9はロクロ整形の土師器で、内面にはロクロナデが施されている。底部は、回転糸切り後に回転ヘラ削りで調整されている。

第5項 まとめ

1. 遺構

加賀後遺跡はこれまでに試掘調査は何度かおこなわれているが、発掘調査が実施されたのは本調査が初めてである。本調査では掘立柱建物跡や土坑等の遺構が確認された。調査区の大部分は後世の掘削を受けているが、遺構は調査区中央北部を中心として分布している。調査区中央北部には、SB01・02ならびにSA01が古墳時代の土坑(SK01・02)に挟まれるように位置している。

SB01は桁行3間×梁行1間という構造で、掘立柱建物跡と断定はできないが、福島県塩川町内屋敷遺跡(植村ほか2004)のSB21・67、福島県玉川村江平遺跡(横須賀ほか2002)SB28・37・47等、桁行3間×梁行1間の構造を有する掘立柱建物跡の類例は比較的多ことから、本遺跡のSB01は掘立柱建物跡の可能性が高いと見ている。

SB01ならびにSB02は、明確に時期を決定できる遺物が出土していないものの、古墳時代後期の土師器が出土していることから、該期の遺構の可能性が考えられ、建物敷地において重複関係にあることから、同一の場所で建て替えがおこなわれた可能性が指摘できる。また、古墳時代終末以降の所産と推定されるSA01についてもSB01・02と建物敷地において重複関係にあることから、古墳時代後期以降同一の場所を利用し続けたと推測される。

SK01は、古墳時代前期の所産と考えられ、土師器が埋設されたように出土しており注目される。SK02の所属時期は古墳時代後期と推定される。遺物が多量に出土しており、復元率は比較的良好なこと、ロームブロック・ローム粒が多量に含まれる人為的な埋土の堆積が認められることから、単なる廃棄場ではない可能性が考えられる。

今回の調査では、掘立柱建物跡・柱列等の遺構の検出という調査成果を得ることができたが、部分的な調査の実施だったため、これらの遺構が遺跡の中でどのような機能を有していたかは不明である。しかし、出土遺物は甌・杯・甕等の日常の道具として使用されるものが中心であることから、本遺跡が低位段丘に形成された集落跡である可能性が指摘できる。今後の調査成果の増加を待つて検討していきたい。

2. 遺物包含層出土土器について

第1地点遺物包含層出土土器は、少量のⅠ群土器(条痕文土器)が出土するものの、多くが縄文時代前期前半に相当するⅡ群土器である。同様の土器群は、本遺跡に隣接する宮田貝塚から多く出土している(竹島1975)。宮田貝塚の報告では、「宮田第Ⅲ群土器」と分類され、「地文として層状ループ文の盛行、それに重層的に併用される羽状縄文や斜行縄文、さらに各種幾何学的な文様帯の構成」が特徴とされた。

当該土器群は、浜通り地方では、段ノ原B遺跡(吉田ほか1995)や山田B遺跡(吉田ほか1997)等で、中通り地方では獅子内遺跡(引地1997、鈴鹿ほか1996・1997・1998・1999)等で良好な資料が得られている。このほか、本遺跡が所在する宮田川流域では、本遺跡から約4km東の海浜部にある北原貝塚遺跡群第1地点貝層(以下「北原貝塚貝層」と称する。)から、まとまった土器群が出土している(川田2004)。これらの資料と比較し、本調査Ⅱ群土器の位置づけを記しておきたい。

Ⅱ群1類土器のうち、a種のうち縄圧痕文が施されるもの(図16-17~22)は、吉田秀享(吉田1997)による山田B遺跡の分類のⅡ-1類に相当し、同種の頸部及び隆帯上等に刺突を施すもの(同図15・16・22・23)は山田B遺跡のⅡ-1・2類に認められる。b種としたもの(同図21)は貝殻腹縁文と判断したが、矢羽状沈線として分類された山田B遺跡Ⅱ-2b類と同様と考えられる。また、口縁上端に刺突が施されるc3種(図18-17~22)も山田B遺跡Ⅱ-2c類に多くが含まれよう。このように、これらの土器群は山田B遺跡Ⅱ-1・2類に相当する。山田B遺跡Ⅱ-1・2類は、段ノ原A遺跡(吉田ほか1995)出土資料と同段階とされ、吉田秀享の段ノ原B遺跡編年(吉田1995)のⅠ期に位置づけられており、これらは本土器群中の中でもより古い様相を示すものである。

口縁部に数列の刺突が施されるc1種(図16-24・25)は、山田B遺跡の分類ではⅡ-3・5類に包括され、Ⅲ期とする新しい段階の土器群とされているが、獅子内遺跡の分析では、段ノ原B編年Ⅱ期が含まれる獅子内第Ⅱ群2a類の土器群に分類され、ループ文を地文とし、地文と無文部の対比によって文様を描くもの主体とした獅子内第Ⅱ群2b類(段ノ原B編年Ⅲ期に相当)に先行するものとされている(鈴鹿1999)。

地文と無文部の対比による文様としては、本土器群ではe種(図18-23~25)が相当し、少量出土しているが、ループ文で施すものは確認できない。25は結束部の回転による文様描出であり、獅子内遺跡の分類では、獅子内1号住居跡出土例などから、獅子内Ⅱ群2a類に含められている。

Ⅱ群1類の中で、最も多く出土しているのがc2種であり、大形破片も多い(図17-1~3)。図17-3は半截竹管による刺突列が施された後、刺突を切るような沈線が付加され、部分的なコンパス文が挿入される。そのほかにもコンパス文が文様に施されるものが一定量存在する(図18-7・8・10)。これらは、吉田の分類によるⅡ-4類に相当し、段ノ原B編年Ⅱ期、獅子内Ⅱ群2a類に位置づけられる。

c2種の中では山形状、円形状、鋸歯状等のいわゆる幾何学的なモチーフを複数数列の刺突文(図16-26~33・図17-2)、C字形爪形文(図17-1・図18-1~6)で施すものが多い。図17-2は吉田が蕨手状モチーフから変遷したとする横S字状の文様であり、平行沈線間に刺突を施した梯子状沈線で文様を描き、地文にループ文がみられる。これらは段ノ原BⅢ期、図17-2はそのなかでも型式学的な見解から古い段階に位置づけられる。また、これらの多くは獅子内遺跡の分類では、獅子内Ⅱ群2a類に含めて考えることができる。

その他、平行沈線文によるもの(図18-11~13)や粘土瘤が口縁部に施されるもの(d

種、図18-15・16)等が存在する。

これらのⅡ群1類を近接する北原貝塚貝層出土土器と比較すると、北原貝塚出土土器は、段ノ原B編年Ⅰ・Ⅱ期に相当する本遺跡1類a・b・c3種や獅子内Ⅱ群2a類の本遺跡c1類が含まれず後出的である。ただし、北原貝塚貝層出土土器にも、獅子内Ⅱ群2b類のループ文で文様を描くものも含まれていないことには留意すべきである。

地文のみが認められる本遺跡Ⅱ群2類については、統計的な分析を行っていないが、0段多糸等の単斜縄文(a種)が最も多く、ついで非結束羽状縄文(b2種)が多い。結束羽状縄文(b3種)とループ文(c種)はほぼ同量である。異節斜縄文は極少量で、組紐文は確認していない。北原貝塚貝層出土土器では組紐文が一定量あり、本土器群より明確な新しい要素を指摘できる。

これらを総合的にみると、文様を施す1類土器は、段ノ原B編年のⅠ期に相当する資料が少量含まれ、Ⅱ～Ⅲ古期に相当する資料が主体を成していると言える。また、これを獅子内B遺跡の分類に当てはめると、図18-25(e種)、図17-3(c2種)など、2a類の基準資料である獅子内遺跡1号・9号住居出土資料(引地1997)に類似資料が認められ、獅子内Ⅱ群2a類と共通する点を多く指摘できる。

段ノ原B編年と獅子内分類では、特に刺突により文様を描くものについて、位置づけなど相違点が認められる。しかし、これら編年案との比較検討から、本土器群が、花積下層式から大木2a式までの間を示す広義の「宮田第Ⅲ群土器」のうち古い様相をもつものであるとすることはできよう。

また、北原貝塚貝層出土土器は、組紐文の有無などから、本土器群に後続するものと言える。ただし、その間にもループ文で文様を施すもの(獅子内2b類)など数段階の土器群が想定され、今後の検討が必要であろう。

さらに、北原貝塚貝層出土土器では、刺突文で文様を描くものも認められることから(報文中図7-1～3等)、獅子内遺跡の分析で既に述べられているように、刺突文による文様描出は次段階以降も継続することが確認できる。

広義の「宮田第Ⅲ群土器」は近年の資料の蓄積の中で、大きな時間幅や複雑な様相を呈することが明らかとなってきている。当該期の土器研究は、一定の枠組みの中での地域的様相の抽出、さらにそれを広域的な視点で位置づける必要性が問われてきており(堀江2006)、一定のまとまりのある本資料の意義も大きいと評価されよう。

表1 1号土坑出土土師器観察表

図	器種	法量 (cm)	調整の特徴	胎土	色調	備考	
		口径 器高 底径					
13	1	土師器 壺	(18.2) — —	内外面口縁横ナデ、赤彩。外面ハケメ後横ナデ。内面ミガキ。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	浅黄橙	口縁部30%残存
13	2	土師器 壺	— — —	内外面頸部横ナデ。外面ハケメ後ヘラ削り。内面体部上半ヘラ削り後ナデ・押捺、体部下半ヘラ削り。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	にぶい橙	胴部30%残存
13	3	土師器 壺	— — —	外面上半ハケメ。下半ヘラ削り後ナデ。内面ヘラ削り。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	にぶい褐色	胴部40%残存
13	4	土師器 壺	— — —	外面ハケメ。内面ヘラ削り。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	にぶい黄橙	胴部30%残存 二次焼成有り

※ () は推定値を表す。

表2 2号土坑出土土師器観察表

図	器種	法量 (cm)	調整の特徴	胎土	色調	備考	
		口径 器高 底径					
14	1	土師器 杯	— —	外面上半横ナデ、下半ヘラ削り。内面ヘラ削り後ミガキ。黒色処理。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	外 黒色 内 黒色	胴部・底部30%残存
14	2	土師器 壺	17.5 12.0 6.7	外面口縁部ハケメ後ナデ、胴部ハケメ。底部木葉痕。内面ヘラ削り後ナデ。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	にぶい黄橙	口縁～底部100%残存
14	3	土師器 壺	— 26.0 7.6	外面口縁・体部上半横ナデ、体部下半ヘラ削り。底部ヘラナデ。内面口縁横ナデ、体部ヘラ削り後ナデ。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	— 橙	胴部30%、底部100%残存
14	4	土師器 壺	— 7.2	内外面ナデ。外面底部木葉痕。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	にぶい橙	底部100%残存 二次焼成有り
14	5	土師器 壺	— (10.0)	外面底部木葉痕・ナデ	密 砂粒・石英・ 白色針物質	浅黄橙	底部60%残存

※ () は推定値を表す。

2号土坑出土石器観察表

図	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
14	6	石皿	石英斑岩	16.2	9.7	4.7	1105
14	7	磨石	安山岩	12.3	9.4	4.0	745

表4 加賀後遺跡出土縄文・弥生土器観察表

図	層位	分類	外面の特徴	内面調整	含有物	その他の特徴	
16	1	包	I	微隆起沈線。交点に棒状工具による刺突。	ナデ	繊維	波状口縁? 図16-2と同一。
16	2	包	I	微隆起沈線内半截竹管凸面刺突。交点に棒状工具による刺突。	ナデ	繊維	波状口縁? 図16-1と同一。
16	3	包	I	口縁刺突。沈線区画内半截竹管凸面刺突。	糸痕	繊維	口縁平縁。
16	4	包	I	口縁刺突。微隆起沈線。交点に棒状工具による刺突。	ナデ	繊維	口縁平縁。
16	5	包	I	口縁棒状工具による刺突。糸痕。	糸痕	繊維	口縁平縁。
16	6	包	I	頸部隆帯。沈線区画内半截竹管凸面刺突。交点に円形竹管文。糸痕。	糸痕	繊維・海綿状骨針	
16	7	包	I	沈線区画内棒状工具?による刺突。糸痕。	糸痕	繊維・海綿状骨針	
16	8	包	I	棒状工具による2本の沈線。糸痕。	糸痕	繊維・海綿状骨針	
16	9	包	I	口縁半截竹管による刺突。斜行沈線→刺突列1列施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	10	包	I	半截竹管による格子状平行沈線文。糸痕。	口縁斜行沈線、糸痕	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	11	包	I	縦隆帯区画斜行沈線施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	12	包	I	絡糸体圧痕。	糸痕	繊維	
16	13	包	I	捺承文(R?)。	糸痕	繊維・海綿状骨針	
16	14	包	I	口縁0段多条タテ施文、頸部横方向のL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	15	包	II-1 a	口縁上端・頸部隆帯上刺突。無節L縄文。	ナデ	繊維	
16	16	包	II-1 a	頸部隆起部刺突。非結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維	
16	17	包	II-1 a	頸部隆起部刺突。口縁縄圧痕文縦区画内縦重状沈線。0段多条。	ナデ	繊維	口縁平縁。
16	18	包	II-1 a	口縁縄圧痕文縦重状施文。ループ文(R摺り?)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	19	包	II-1 a	口縁及び頸部隆起部半截竹管凸面による刺突。縄圧痕文による円形モチーフ+横位多段施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	20	包	II-1 a	2本1対の八字状の縄圧痕文を蕨手状(?)に施文。空白部を短沈線(刺切文)で充填。	ナデ	繊維	
16	21	包	II-1 b	底部下部に貝殻痕緑文を羽状施文。結束羽状縄文の結束部のみ施文。	ナデ	繊維	底部下部破片。
16	22	包	II-1 a	口縁上端棒状工具による刺突。口縁へラ状工具による刺突列4列。頸部隆起部縦長の刺突。L縄文?	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	23	包	II-1 a	頸部棒状工具による刺突列。結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
16	24	包	II-1 c 1	口縁半截竹管による刺突列2列。結束羽状縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	25	包	II-1 c 1	口縁半截竹管による刺突列3列。0段多条(R)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	26	包	II-1 c 2	口縁へラ状工具による2列の刺突施文。文様上横位区画、山形文施文、下区画無し。結束羽状縄文(0段多条?)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	27	包	II-1 c 2	口縁半截竹管凹面による2列の刺突施文。文様上下横位区画、円形または山形状に施文。	ナデ	繊維	口縁平縁。補修孔あり。
16	28	包	II-1 c 2	口縁半截竹管凹面による3列の刺突施文。文様上横位区画、大小の山形状に施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
16	29	包	II-1 c 2	半截竹管?による刺突を円形(蕨手状)に施文。中心に円形竹管文。	ナデ	繊維	
16	30	包上面	II-1 c 2	半截竹管凹面による2列の刺突施文。文様下横位区画、円形(蕨手状)に施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
16	31	包	II-1 c 2	へラ状工具による2個1対の刺突施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
16	32	包	II-1 c 2	へラ状工具による刺突施文。	ナデ	繊維	

※表中の「包」は遺物包含層を指す。

回	層位	分類	外面の特徴	内面調整	含有物	その他の特徴	
16	33	包	II-1c2	半截竹管凹面による刺突施文。文様上横位区画、山形(麴曲状)に施文。縄文?	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
17	1	包	II-1c2	口縁部C字形爪形文による施文。文様上下2列、縦3列区画内2列の菱形文。交点に2個1対の円形竹管文。ループ文(1指頭幅・1総り)。	ナデ	砂粒、石莖、金雲母多量。繊維	口縁平縁。口径32.2cm。焼成不良。胎土粗い。
17	2	包	II-1c2	口縁部2列の平行沈線間にへう状工具による刺突による施文。下端区画横S字状文。ループ文(1指頭幅・R総り)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
17	4	包	II-2	非結束羽状縄文(LR・RL)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口径22.4cm。
17	3	包	II-1c2	横位の密な半截竹管による刺突列を全面的に施文。刺突後、刺突を切るように沈線が引かれる。刺突列内に半截竹管によるコンパス文を部分的に施文。底部中央に円形竹管文、同心円状に刺突列施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	底径8.2cm。
17	5	包	II-2b1	結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。口径11.8cm。
17	6	包	II-2c	ループ文(1指頭幅・1総り)。	ナデ	繊維	口縁平縁。口径13.0cm。
17	7	包	II-2a	0段多条。	ナデ	繊維・海綿状骨針	4単位山形突起。波状口縁。口径16.0cm。
17	8	包上面	II-1c2	下端C字型爪形文施文。非結束羽状縄文(LR?・RL)。	ナデ	繊維	底面ナデ。底径6.2cm。
17	9	包	II-2b2	非結束羽状縄文(LR?・RL)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	底面ナデ。底径8.2cm。
17	10	包	II-2a	RL縄文?	ナデ	繊維・海綿状骨針	底部やや上げ底。底径6.2cm。
17	11	包	II	粗いナデ。一部縄圧痕。	ナデ	繊維	底部やや上げ底。底径6.8cm。
17	12	包	II	ナデ。	ナデ	繊維・海綿状骨針	底部やや上げ底。底径6.6cm。手づくね整形。
17	13	包	II-1c2	底面半截竹管による刺突による施文。2列の円形刺突列内区画に同一方向の4列の刺突列。ナデ?	ナデ	繊維・海綿状骨針	底部平坦。底径9.6cm。
17	14	包	II-1c2	底部・胴部RL縄文	ナデ	繊維・海綿状骨針	底部やや上げ底。底径7.4cm。
17	15	包	II-2a	下端半截竹管による刺突列施文。底面、筒工具による同心円状の刺突列。ナデ。	ナデ	繊維・海綿状骨針	底部やや丸底。底径8.2cm。
17	16	包	II-2a	底面LR縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	底部平坦。底径5.0cm。
18	1	包	II-1c2	口縁C字形爪形文2列による施文。文様上横位区画、山形に施文。円形竹管文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	波状口縁。
18	2	包	II-1c2	口縁C字形爪形文2列による施文。文様上横位区画、麴手状に施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	波状口縁。
18	3	包上面	II-1c2	波頂部縦長の突起。、口縁C字形爪形文2列による施文。文様上横位区画、突起下円形竹管文に伴い、弧状に施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	波状口縁。
18	4	包	II-1c2	口縁C字形爪形文2または3列による施文。円形竹管文を中心に縦位、横位に施文。文様上横位区画、山形に施文。円形竹管文。	ナデ	繊維	
18	5	包	II-1c2	頸部C字形爪形文3列による横位施文区画。RL縄文?	ナデ	繊維	
18	6	包	II-1c2	口縁C字形爪形文2または3列による施文。文様下横位区画、山形に施文。	ナデ	繊維	
18	7	包	II-1c2	口縁C字形爪形文2列による文様上下横位区画施文。横位コンパス文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	波状口縁?
18	8	包	II-1c2	口縁C字形爪形文3列による文様上横位区画施文。横位コンパス文。	ナデ	繊維	
18	9	包	II-1c2	頸部半截竹管による平行沈線文間にC字形爪形文施文0段多条(R)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
18	10	包	II-1c2	頸部地上文に横位コンパス文。RL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
18	11	包	II-1c2	口縁半截竹管による平行沈線文。	ナデ	繊維	図18-12と同一。
18	12	包	II-1c2	口縁半截竹管による平行沈線文。	ナデ	繊維	図18-11と同一。
18	13	包	II-1c2	口縁上細縦長刺突列。波状?の平行沈線文。縄文?	ナデ	繊維・海綿状骨針	

※表中の「包」は遺物包含層を指す。

図	層位	分類	外面の特徴	内面調整	含有物	その他の特徴
18	14	包 II-1c2	地文上に4列の円形竹管文列を菱形状に施文。非結束羽状縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
18	15	包 II-1d	口縁2列の粘土瘤(点状)文様を横位施文。ループ文(1指頭幅・羽状)。	ナデ	繊維	口縁平縁。
18	16	包 II-1d	口縁2列の粘土瘤(点状)文様を対角交互に施文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
18	17	包 II-1c2	口縁上端半截竹管凸面による刺突。結束羽状縄文。	ナデ	繊維	口縁平縁。
18	18	包 II-1c2	口縁上端棒状工具による刺突。非結束羽状縄文(RL・LR縄文)。	ナデ	繊維	口縁平縁。
18	19	包 II-1c2	口縁上端工具による縦長刺突。非結束羽状縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
18	20	包 II-1c2	口縁上端指頭による緩やかな凹凸。RL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
18	21	包 II-1c2	口縁上端縄文圧痕による押捺。非結束羽状縄文(RL・LR縄文)。	ナデ	繊維	口縁平縁。
18	22	包上面 II-1c2	口縁上端縄文圧痕による押捺。RL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。補修孔あり。
18	23	包 II-1e	地文施文後横位の磨り消し。RL縄文。	ナデ	繊維	口縁平縁。
18	24	包 II-1e	地文施文後横位の磨り消し。結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
18	25	包 II-1e	結束羽状縄文の結束部を密着状に施文。結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維	口縁平縁。
19	1	包 II-1c2	口縁2個1対の円形刺突施文の突起。ループ文(2指頭幅・0段多状R)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。図19-2と同一。
19	2	包 II-1c2	口縁2個1対の円形刺突施文の突起。ループ文(2指頭幅・0段多状R)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。図19-1と同一。
19	3	包 II-2a	口縁小突起。RL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
19	4	包 II-2b1	縄文斜行施文。結束羽状縄文(RL・LR縄文?)。	ナデ	繊維	波状口縁。
19	5	包 II-2b1	結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維	
19	6	包 II-2b1	結束羽状縄文(0段多条?)。	ナデ	繊維	
19	7	包 II-2b1	結束羽状縄文(0段多条?)。	ナデ	繊維	
19	8	包 II-2b2	不規則に施文。非結束羽状縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
19	9	包 II-2b2	菱形に施文。非結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維	
19	10	包 II-2b2	非結束羽状縄文(RL・LR縄文)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
19	11	包 II-2b2	不規則に施文。非結束羽状縄文(RL・LR縄文)。	ナデ	繊維	
19	12	包 II-2b2	非結束羽状縄文(0段多条?)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
19	13	包 II-2b2	非結束羽状縄文(RL・LR縄文)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
19	14	包 II-2b2	非結束羽状縄文(RL・LR縄文)。	ナデ	繊維	
19	15	包 II-2b2	非結束羽状縄文(RL縄文・0段多条)。	ナデ	繊維	
19	16	包 II-2b2	非結束羽状縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
19	17	包 II-2b2	非結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
19	18	包 II-2b2	非結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維	
19	19	包 II-2b2	非結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維	
19	20	包 II-2b2	非結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
19	21	包 II-2b2	非結束羽状縄文(RL・LR縄文)。	ナデ	繊維	追加整形技法が認められる。
19	22	包 II-2b2	非結束羽状縄文(0段多条?)。	ナデ	繊維	
19	23	包 II-2b2	非結束羽状縄文(0段多条)。	ナデ	繊維	
20	1	包 II-2c	ループ(1指頭幅・0段多条)。	ナデ	繊維	口縁平縁。

※表中の「包」は遺物包含層を指す。

図	層位	分類	外面の特徴	内面調整	含有物	その他の特徴
20	2	包 II-2c	ループ文(羽状・1指頭幅)。	ナデ	繊維・石英	
20	3	包 II-2c	ループ文(1指頭幅)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	4	包 II-2c	ループ文(1指頭幅・RL縄文)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	5	包 II-2c	ループ文(1指頭幅・0段多糸)。	ナデ	繊維	
20	6	包 II-2c	ループ文(2指頭幅・RL縄文)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	7	包 II-2c	ループ文(2指頭幅・RL縄文)。	ナデ	繊維	
20	8	包 II-2c	ループ文(2指頭幅・RL縄文)。	ナデ	繊維	
20	9	包 II-2c	ループ文(1指頭幅・0段多糸)。	ナデ	繊維	
20	10	包 II-2c	ループ文(2指頭幅・RL縄文)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	11	包 II-2c	ループ文(羽状・1指頭幅・0段多糸)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	12	包 II-2c	ループ文(羽状・1指頭幅・RL・RL縄文)。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	13	包 II-2a	RL縄文。	ナデ	繊維	口縁平縁。
20	14	包 II-2a	RL縄文?	ナデ	繊維	口縁平縁。補修孔あり。
20	15	包 II-2a	無節R縄文?	ナデ	繊維	口縁平縁。
20	16	包 II-2a	RL縄文。	ナデ	繊維	口縁平縁。
20	17	包 II-2a	RL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
20	18	包 II-2a	RL縄文。	ナデ	繊維	口縁平縁。
20	19	包 II-2a	RL縄文(ループ文)?	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。補修孔あり。
20	20	包 II-2a	LR縄文?	ナデ	繊維	
20	21	包 II-2a	RL縄文?	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	22	包 II-2a	LR縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	23	包 II-2a	RL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	24	包 II-2a	RL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
20	25	包 II-2a	RL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
21	1	包 II-2d	異節斜縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
21	2	包 II-2d	異節斜縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
21	3	包 II-2d	LRL縄文。	ナデ	繊維	
21	4	包 II-2d	LRL縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
21	5	包 II-2d	RLR縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
21	6	包 II-2d	RLR縄文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	
21	7	包 II-2d	無文。L燃り縄文摩滅か?	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
21	8	包 II-2d	無文。R燃り縄文摩滅か?	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。
21	9	包 II-2d	無文。	ナデ	繊維・海綿状骨針	口縁平縁。補修孔あり。
22	1	表土 I	口縁上端縄文施文。微隆起線施文。	貝殻骨圧痕文	繊維	口縁平縁。
22	2	表土 I	隆帯に沿う上下1列の刺突。縄文?	ナデ	繊維	
22	3	SK03 II-2c2	口縁2列のC字形爪形文。山形(鋸歯状)沈線文。	ナデ	繊維	口縁平縁。
22	4	表土 II-2c1	口縁上端1部刺突列。口縁3列の半截竹管による刺突列。非結束羽状縄文。	ナデ	繊維	口縁平縁。

※表中の「包」は遺物包含層を指す。

図	層位	分類	外面の特徴	内面調整	含有物	その他の特徴	
22	5	表土	Ⅱ-2c2	口縁部C字形爪形文による施文。文様下2列区画、内形（鉄手状）に施文。内中央及び文様区画上に内形竹管文。ループ文（1指頭幅・L燃り）。	ナデ	繊維	
22	6	表土	Ⅲ	妻口縁。弧状の沈線区画内磨消縄文。附加糸1種。	ミガキ	海綿状骨針	口縁平縁。
22	7	包	Ⅲ	沈線区画縄文施文。L燃り縄文。	ナデ		口縁平縁。
22	8	P34	Ⅲ	附加糸1種。	ナデ		
22	9	P55	Ⅲ	菱形に施文。附加糸1種。	ナデ	海綿状骨針	
22	10	P19	Ⅲ	附加糸1種（L燃り）。	ナデ	海綿状骨針	
22	11	P36	Ⅲ	附加糸1種（L燃り）。	ナデ		

※表中の「包」は遺物包含層を指す。

表5 遺物包含層出土土製品観察表

図	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	備考
23	包	土製品	4.6	2.9	0.7	8.0	

※表中の「包」は遺物包含層を指す。

表6 遺物包含層出土石器観察表

図	層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	備考
24	1	包	石匙	頁岩	7.4	2.1	0.7	10.0
24	2	包	石匙	頁岩	6.3	2.6	0.7	10.6

※表中の「包」は遺物包含層を指す。

表7 遺構外出土土器器観察表

図	器種	注量 (cm)		調整の特徴	胎土	色調	備考
		口縁部高さ	底径				
25	土師器 器台	— — (10.0)	—	外面脚部ナデ。内面器受部ナデ、脚部上半へラ削り、下半ナデ。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	橙	底部30%残存
25	土師器 器台	— — —	—	外面脚部へラ削り後ナデ。内面ナデ。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	にぶい褐色	脚部30%残存
25	土師器 甕	— — 4.8	—	外面へクメ後ナデ。内面へラ削り後ナデ。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	にぶい橙	胴部50%残存 底部100%残存 二次焼成有り
25	土師器 杯	— — 2.0	—	外面へラ削り後ミガキ。内面へラ削り。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	浅黄橙	底部100%残存
25	土師器 高杯	— — —	—	外面ミガキ、赤彩。内面杯部粗いへラ削り後ナデ、脚部ナデ。脚部穿孔。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	にぶい橙	脚部100%残存
25	土師器 甕	(17.2) — —	—	内外面口縁へラ削り後ナデ、胴部へラ削り。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	浅黄橙	口縁部30%残存
25	土師器 高杯	— — 5.4	—	内外面ナデ。底部へラ削り？	密 砂粒・石英・ 白色針物質	浅黄橙	底部95%残存
25	土師器 甕	— — (5.4)	—	外面へクメ後ナデ。内面輪積痕。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	浅黄橙	底部50%残存
25	土師器 杯	— — 6.4	—	外面回転ナデ、底部回転へラ削り・回転糸切り痕。内面ロクロナデ。	密 砂粒・石英・ 白色針物質	灰白	底部90%残存

※ () は推定値を示す。

第IV章 開発に伴う試掘調査

第1節 大田和広畑遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の調査は、県道中ノ内・小高線歩道設置工事に伴い実施された。当該計画地は、文化財保護法にいう周知の埋蔵文化財包蔵地の『大田和広畑遺跡』に該当するため、工事の年次計画にあわせて平成16年・平成17年に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施し、その結果をもって保存協議をおこなうこととした。

第2項 遺跡概要

本遺跡は、小高川北側の河岸段丘に立地する遺跡で、標高45～60mを測る。昭和46年の竹島国基氏の表面調査では、大木7b・9式および堀ノ内式が表採されており、周知の埋蔵文化財包蔵地として古くから知られていた。常磐自動車道建設に伴い、平成9年に福島県文化振興事業団が表面調査をおこない、遺物の散布状況や地形等から包蔵地の範囲が拡大された。平成16年には試掘調査が実施され、縄文時代の土坑が検出され、保存対象区域が設けられてい

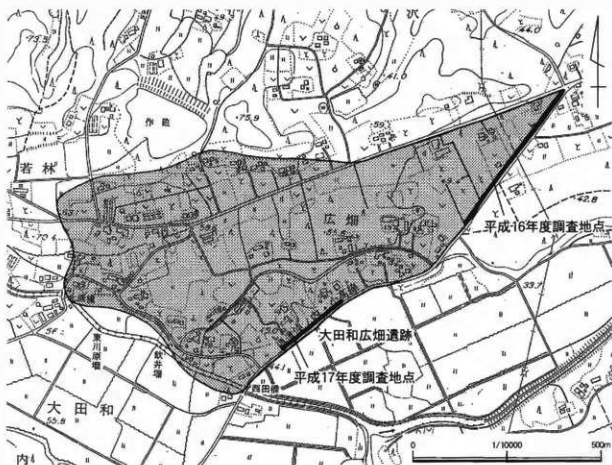


図26 大田和広畑遺跡位置図 (S=1/10000)

る(註1)。一方、平成12年には町道改良工事に伴う試掘調査が旧小高町教育委員会によっておこなわれたが、明確な遺構・遺物は確認されなかった。

第3項 調査の方法

平成16年の調査は、開発予定地内に3m×20mのトレンチを3本設定した。調査は、表土除去ならびに埋め戻しは0.25m³のバックホーを用いておこない、それ以外の遺構検出作業・精査作業は人力でおこなった。トレンチ番号は、平成12年に実施した調査のトレンチ番号の続き番号でつけた。記録写真の作成は35mm判カラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルムで作成し、適宜デジタルカメラを使用した。記録図面は、調査区を地形図に図示した。

平成17年の調査は、道路法線に直交するように2m×5mのトレンチ3本、2m×7mのトレンチを1本、3×7mのトレンチを1本、4m×5mのトレンチを1本設定した。また、耕作地については1×2mグリットを2箇所、1×1mグリットを1箇所設定して試掘調査を行った。トレンチについては表土から遺構検出面に到達するまでの堆積土は0.7m³のバックホーにて除去し、それ以降の遺構検出作業・精査作業は人力でおこなった。グリットについては表土除去ならびに遺構検出作業・精査作業は人力でおこなった。トレンチ番号は、平成16年に実施した調査のトレンチ番号の続き番号でつけた。調査区内から遺物が出土した場合は、調査区名・層位・日付を記録の上で取り上げた。記録写真の作成は35mm判カラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルムで作成し、適宜デジタルカメラを使用した。記録図面は、平面図は調査区を地形図に図示し、断面図はS=1/20の縮尺率で作成した。

第4項 調査要項と調査成果

調査要項(平成16年)

所在地：南相馬市小高区飯崎字広畑

調査期間：平成16年6月30日

対象面積：2,010m²

調査面積：180m²

調査担当：川田 強

発掘補助員：発田 清

調査要項(平成17年)

所在地：南相馬市小高区大田和字広畑

調査期間：平成17年11月14日～12月7日

対象面積：687.28m²

調査面積：90m²

調査担当：佐川 久

発掘補助員：佐々木慎太郎・発田 清

調査成果（平成16年）

5 T：開発予定地の北東部に設けた3m×20mの南北トレンチである。遺構検出面のロームまで掘削したが、明確な遺構・遺物は検出されなかった。ロームは、深さ約40～60cmで確認された。

6 T：5トレンチ南西約115mの地点に設けた3m×20mの南北トレンチである。遺構検出面のロームまで掘削したが明確な遺構・遺物は検出されなかった。ロームは深さ約40～60cmで確認された。

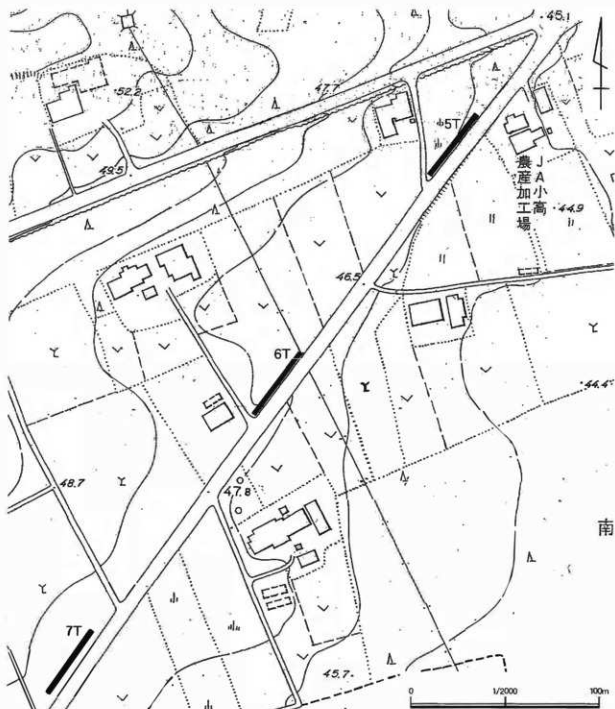


図27 平成16年度調査地点 (S=1/2000)

7T：6トレンチの南西約142mの地点に設けた3m×20mの南北トレンチである。遺構確認面のルームまで掘削したが、明確な遺構・遺物は検出されなかった。ルームは深さ約40～50cmで確認された。

調査成果（平成17年）

8T：開発予定地のほぼ中央部に設定した3m×7mの南北トレンチである。遺構検出面であるルームまで掘削したが、数点の縄文土器が出土したものの、明確な遺構は検出されなかった。深さ約1.5mでルームが確認された。

9T：8トレンチの北東約21mの地点に設けた2m×7mの南北トレンチである。深さ約1.9mで地山と考えられる暗褐色土を確認した。また、トレンチ南端では、暗褐色土下に堆積する白黄色粘土を確認した。数点の縄文土器が出土したものの、明確な遺構は確認されなかった。

10T：9トレンチの北東約23mの地点に設けた4m×5mの南北トレンチである。断面図を図29に示した。深さ約1.3～1.6mのところで暗褐色土(L5)の堆積を確認した。内容確認のため10cm程度掘削して、縄文後期前半の土器が出土することを確認したことから、このL5は縄文後期前半の遺物包含層と考えられる。また、L5から縄文時代の



図28 平成17年度調査地点 (S=1/2000)

所産と推測される埋設土器を検出した。工事による掘削が埋設土器の検出面の深さまで及ばないことから、調査を行わずに埋め戻した。

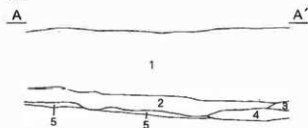
11T : 10 トレンチの北東約 16 m の地点に設けた 2 m × 5 m の南北トレンチである。深さ約 1.3 m で黒褐色土の堆積を確認し、内容確認のため約 10 cm 程度の掘削をおこなった。

この結果、縄文後期前半を中心とする縄文土器の出土が確認されたことから、縄文後期前半の遺物包含層の可能性が高いと見ている。

12T : 11 トレンチの北東約 23 m の地点に設けた 2 m × 5 m の南北トレンチである。断面図を図 29 に示した。深さ約 1.0 m で黒色土 (L 4) の堆積を確認した。内容を把握するためにサブトレンチを設定して調査をおこない、基盤層であるロームまで掘削した。黒色土は 3 層 (L 4~6) に分けることができるが、L 4 から最も多く遺物が出土し、L 5・6 と下位にいくに従って遺物の出土量が減少していく。L 6 下には暗褐色土 (L 7・8) が約 20 cm の厚さをもって堆積している。L 4~6 から出土した遺物は縄文後期前半の土器が中心であることから、L 4~6 は当該期の遺物包含層と考えられる。L 7・8 からも少量の縄文土器が出土しているが、少片のため詳しい時期は不明である。

13T : 12 トレンチの北東約 18 m の地点に設けた 2 m × 5 m の南北トレンチである。深さ約 1.2 m でややシルト質の黒色土の堆積を確認した。工事による掘削が黒色土の堆積する深さまで及ばないことから、調査はおこなっていないが、上面からは多数の縄文後期前半の土器が出土していること、12 トレンチで検出した L 4~6 に類似していることから、縄文後期前半の遺物包含層の可能性が高いと見ている。

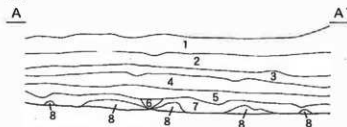
10T



10T 東壁断面図

- 1 黄土 (腐土)
- 2 黒褐色土 粘性中、締まり中、ローム粒・赤色土粒微量、小石・レキ少量。
- 3 黒色土 粘性中、締まり中、炭化粒・小石・レキ微量、ローム粒・赤色土粒少量。
- 4 暗褐色土 粘性中、締まり中、炭化粒・小石微量、ローム粒・赤色土粒・レキ少量。
- 5 暗褐色土 粘性中、締まり強、ローム粒・炭化粒・小石・レキ微量、赤色土粒中量。(埋設土器確認)

12T



12T 東壁断面図

- 1 黒色土 粘性弱、締まり中、レキ少量、小石中量。
- 2 黒褐色土 粘性中、締まり強、炭化粒少量、ローム粒・小石中量、ロームブロック多量。
- 3 黒色土 粘性中、締まり中、炭化粒微量、ローム粒・炭化粒少量、レキ中量、小石多量。
- 4 黒色土 粘性中、締まり中、ローム粒・炭化粒少量、小石中量、レキ多量。(3層より明るい)
- 5 黒色土 粘性中、締まり中、ローム粒・炭化粒・レキ少量、小石中量。(4層より褐色がかっている)
- 6 黒色土 粘性中、締まり中、小石少量。(5層より明るい)
- 7 暗褐色土 粘性中、締まり中、炭化粒微量、ローム粒少量、小石多量、レキ極多量。
- 8 暗褐色土 粘性中、締まり中、ローム粒少量、小石・レキ多量。
- 9 黄褐色土 粘性中、締まり中、小石・レキ多量。(シルト質)

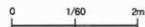


図29 遺物包含層断面図 (S=1/60)

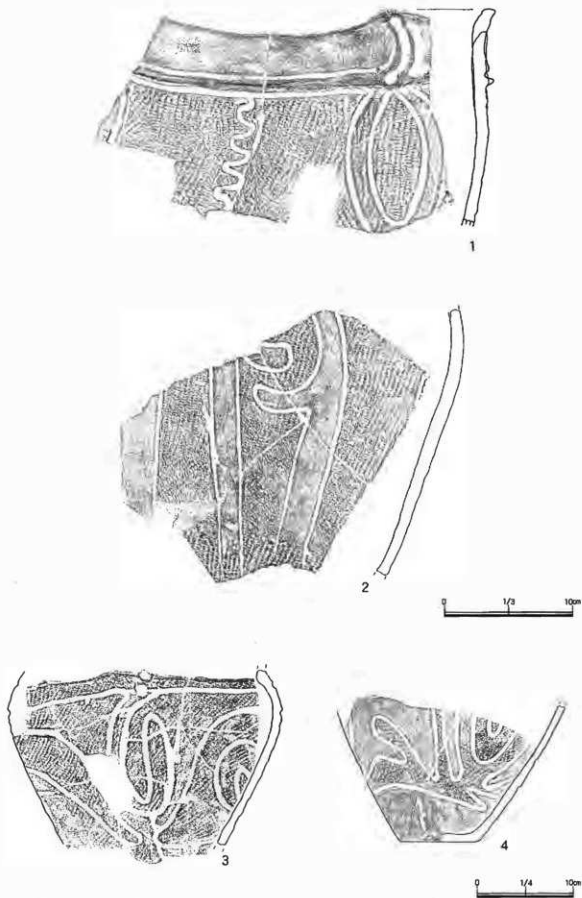


図30 遺物包含層出土遺物

- 1 G : 本調査区は4トレンチの南西約35mの地点に設けた1m×2mの南北トレンチである。表土下約20cmで10トレンチのL5に類似する暗褐色土の堆積を確認した。遺物の出土状況を確認するため暗褐色土を約10cm程度の掘削をおこない、縄文後期前半の土器が出土したことから、暗褐色土は縄文時代の遺物包含層と推定している。
- 2 G : 本調査区は1グリットの南西約9mの地点に設けた1m×2mのグリットである。1グリットと同様に、表土下約20cmで10トレンチのL5に類似した暗褐色土の堆積を確認した。遺物の出土状況を確認するため暗褐色土を約10cm程度の掘削をおこない、縄文後期前半の土器が出土したことから、暗褐色土は縄文時代の遺物包含層と推定している。
- 3 G : 本調査区は2グリットの南西約20mの地点に設けた1m×1mのグリットである。表土下約20cmで黒色土の堆積を確認した。遺物の出土状況を確認するために約20cmの掘削をおこなったが、遺物は出土しなかった。また、堆積した黒色土の厚さを確認するために検土杖によるボーリング調査をおこない50cm以上堆積していることを確認した。黒色土の堆積が厚いこと、調査区の幅が狭いことからこれ以上の掘削はおこなわなかった。

出土遺物 (図30)

12トレンチで確認された黒色を呈する遺物包含層(L4~6)に設定したサブトレンチ内から出土した土器で、代表的なもの4点のみ図示した。1~4は、すべて深鉢形土器である。1は、直立的に立ち上がり緩やかな波状を呈する口縁部である。口縁部文様帯を区画する横位の隆帯と隆帯に沿って沈線が施されている。口縁波状部には沈線を有する弧状の隆線を配し、その直下からは2条の沈線により楕円形状に区画された磨消縄文が認められる。隆帯下の沈線から蛇行沈線が垂下している。2は、やや内傾する胴部であり、磨消縄文により向かい合った蕨手文が描出されている。3は、口縁部と底部を欠損するため全体の器形を知ることはできないが、胴部上半が膨らみ、やや強く括れ口縁に向かう器形となる。胴部上半に口縁部文様帯を区画する2条の沈線が巡り、沈線上には2個1対の円孔が4箇所施される。この4箇所のうち3箇所の円孔下には、口縁部文様帯を区切る沈線から続く逆「J」字状の縄文帯の区画が認められる。逆「J」字状の縄文帯の間には、沈線区画の文様が横位に展開している。4は、平底の底部である。沈線で区画された縄文帯で文様が構成されている。胴部下半部には無文部分が見られる。1~4とも網取式期所産である。これらの土器以外にも多数の土器が出土しているが、未整理のため改めて報告することにしたい。

第5項 調査所見

平成16年調査地点の5~7トレンチでは、明確な遺構・遺物が認められなかったがことから、遺跡の中心部分の本計画地より西側に展開すると考えられる。

このことから、本計画地は発掘調査の必要はないと判断されるが、埋蔵文化財包蔵地内では慎重工事を必要とする。

平成17年に実施した試掘調査地点の8・9トレンチでは、数点の縄文土器が出土したが、遺構は確認できなかった。10～13トレンチならびに1・2グリットでは、縄文時代の埋設土器、ならびに縄文時代と考えられる遺物包含層が検出されたことから、本計画地周辺では竪穴住居跡等の遺構が確認される可能性が高いと推測される。

このような調査結果と本土工事内容を検討した結果、8・9トレンチ周辺の区域については遺構・遺物包含層が確認されていないことから、発掘調査の必要はないが、開発に際しては慎重工事を要する。また、遺構・遺物包含層が確認された10～13トレンチならびに1・2グリットを中心とした区域については、工法対応等により遺構等を損壊させない施工が望ましいが、工法対応が困難な場合には記録保存のための発掘調査が必要と判断される。

(註1) 安田 穂ほか2005「大田和広畑遺跡」『福島県内遺跡分布調査報告書11』福島県文化財調査報告第419集

福島県教育委員会

表8 大田和広畑遺跡出土縄文土器観察表

図	層位	分類	外面の特徴	内面調整	地文	含有物	その他の特徴
30	1	包 網取式	波状口縁部に沈線を有する弧状隆線。 2条の沈線よる楕円形状磨消縄文。 蛇行沈線。	ナデ	LR縄文	砂粒・石英・ 金雲母・海綿 状骨針	波状口縁
30	2	包 網取式	磨消縄文による2個一対の蕨手文。	ナデ	LR縄文	砂粒・石英・ 海綿状骨針	
30	3	包 網取式	2個一対による円孔。 逆J字状磨消縄文。 横位区画磨消縄文。	ナデ	LR縄文	砂粒・石英・ 海綿状骨針	
30	4	包 網取式	横位区画磨消縄文。	ナデ	LR縄文	砂粒・石英・ 金雲母・海綿 状骨針	

※表中の「包」は遺物包含層を指す。

第2節 北原貝塚遺跡群

第1項 調査に至る経過

町道幾世橋・小高線改良事業計画に伴い、埋蔵文化財の有無が照会され、埋蔵文化財包蔵地台帳との照合ならびに現地踏査を実施した。当該計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である『北原貝塚遺跡群』が所在しているため、遺構等の有無を確認するために試掘調査を実施し、その結果をもって保存協議をおこなうことが必要である旨を回答した。

第2項 遺跡概要

北原貝塚遺跡群は、縄文時代から平安時代の集落跡・遺物散布地として登録されている。現海岸線から西に約200m、大正時代に干拓された旧井田川浦の汀線から南に約550mに位置する。北西方向に延びた舌状の中位段丘に所在し、標高は20～24mを測る。

本遺跡群には、「北向」・「神ノ前」・「北原」・「北原西」と名づけられた4箇所の貝層が所在する。これらをまとめて「北原貝塚遺跡群」と呼称している。平成10年には、北原西貝塚

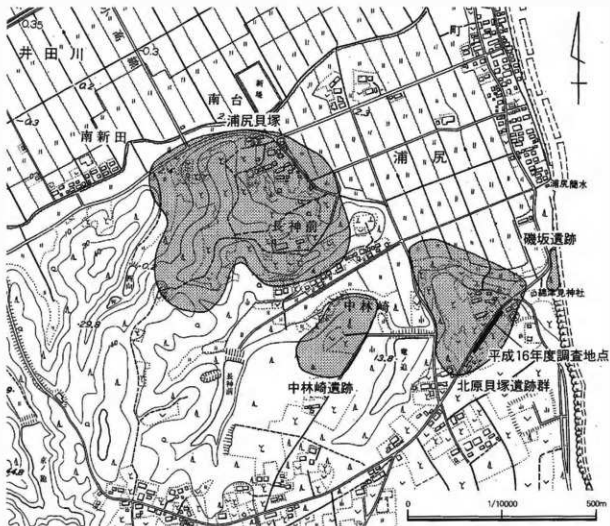


図31 北原貝塚遺跡群位置図 (S=1/10000)

の貝層が自然崩壊していたことから、記録保存を目的とした発掘調査が行われ、縄文前期前半のイボキサゴを主体とする貝層が確認されている。また、ほ場整備に伴う試掘調査が行われ、1～3トレンチで宮田Ⅲ群～大木2a式、大木5式が出土する遺物包含層を確認している。平成11年には、県道改良工事に伴い試掘調査が実施されたが、遺構等は確認されなかった。平成13年には個人住宅建設に伴い発掘調査が実施され、縄文早期末～前期前半と推定されるピット群を確認している。平成15年には、表面調査ならびに検土杖によるボーリング調査を実施して現状の貝層範囲を確認している（図32）。「北向」・「神ノ前」・「北原」ではこれまでの貝層推定範囲より縮小し、「北原西」では貝層が確認できなかった（註1）。

本遺跡の周辺には、国指定史跡である浦尻貝塚、製塩土器を伴う縄文晩期の包含層が確認されている磯坂遺跡、弥生～平安時代の遺物散布地として登録されている中林崎遺跡が所在する。

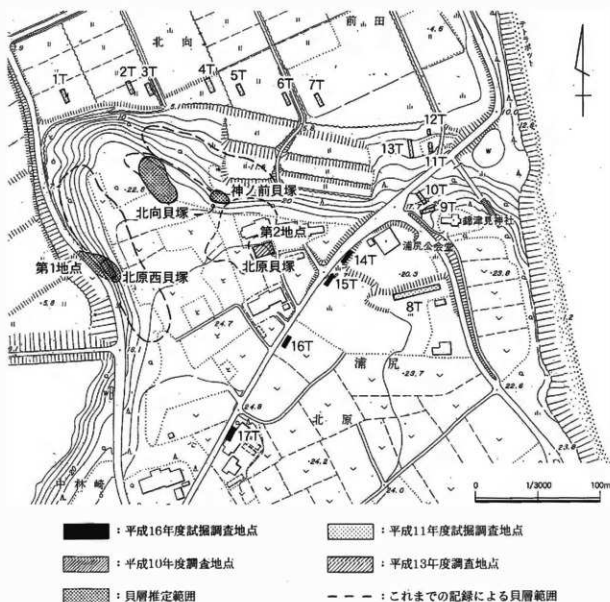


図32 北原貝塚遺跡群調査状況図 (S=1/3000)

第3項 調査の方法

調査は、開発計画地のうち試験調査が可能な場所に幅3m×10mの調査区を4箇所に向け、遺構・遺物の有無を確認した。トレンチ番号は、平成11年に実施した調査のトレンチ番号の続き番号でつけた。表土除去と埋め戻し作業は0.25㎡の重機を用い、それ以外の遺構検出作業や精査作業は人力で行った。調査記録の作成は、35mm判カラーリバーサルフィルムで行い、適宜デジタルカメラを使用した。記録図面は、遺構が確認された調査区については、平板測量を用いてS=1/20の縮尺率で作成したが、遺構が確認されなかった調査区については地形図に調査区を図示するに留めた。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市小高区浦尻字北原
 調査期間 平成17年9月13日
 対象面積 4,869㎡
 調査面積 120㎡
 調査担当 川田 強
 発掘補助員 佐々木慎太郎、発田 清

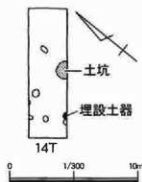


図33 トレンチ平面図

調査成果

- 14T：調査対象区の最も東側に設けた3m×10mの調査区である。縄文時代の土坑と弥生時代の埋設土器を確認した。遺構検出面は、ハードローム面である。
- 15T：14トレンチの西側に位置する3m×10mの調査区である。後世の掘削を受けており、遺構・遺物は認められなかった。
- 16T：調査対象区のほぼ中央に位置する3m×10mの調査区である。後世の掘削を受けており、遺構・遺物は認められない。
- 17T：本調査区は16トレンチの西側に位置する調査区である。3m×10mの調査区である。後世の掘削を受けており、遺構・遺物は認められなかった。

第5項 調査所見

本遺跡の調査では、14トレンチで縄文時代の土坑と弥生時代の埋設土器を確認した。15～17トレンチについては、本来遺構等が存在していた可能性も考えられるが、現在は後世の掘削を受けており明確な遺構を確認することはできなかった。このような調査結果と本土木工事内容を検討した結果、14トレンチを中心に要保存対象区域が設定され、開発計画においては遺跡の保全に関する協議が必要である。それ以外の地区については、発掘調査の必要はないと判断されるが、埋蔵文化財包蔵地内では慎重工事を必要とする。

(註1) 川田 強2004『北原貝塚遺跡群』小高町埋蔵文化財報告第5集 小高町教育委員会

第3節 片草南原遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の調査は、町営グラウンド建設工事に伴い、埋蔵文化財の有無が照会され、埋蔵文化財包蔵地との照会ならびに現地踏査を実施したところ、当該計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地の『片草南原遺跡』に所在していることが確認された。そのため事前に遺構等の有無を確認する試掘調査を実施し、その結果をもって保存協議が必要であることを回答した。

第2項 遺跡概要

本遺跡は、小高川の支流前川の北岸に広がる河岸段丘に所在する。遺跡が立地する段丘は、標高約30m前後を測り、舌状に南東へせり出している。段丘面全体が埋蔵文化財包蔵地となっており、北西側の片草南原遺跡と南東側の荒神前遺跡が隣接している。片草南原遺跡は、縄文時代～平安時代の複合遺跡として登録されている。段丘の南側縁辺部には、円墳8基が確認されている古墳時代後期の片草南原古墳群が所在する。

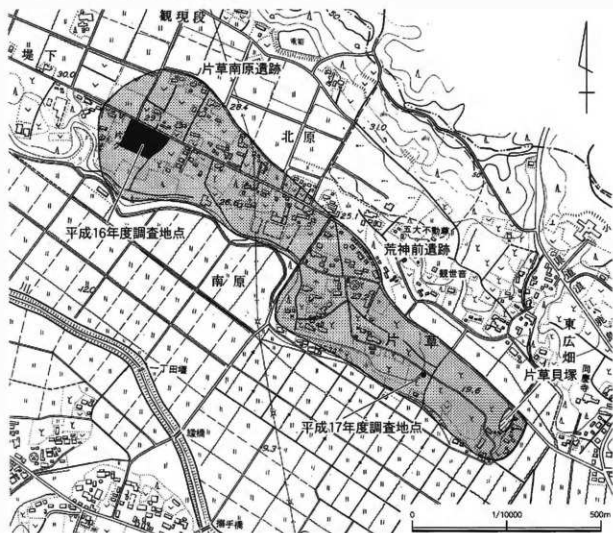


図34 片草南原遺跡・荒神前遺跡位置図 (S=1/10000)

第3項 調査の方法

調査は、開発計画地内に幅3×20mの調査区を8箇所、6×10mの調査区を1箇所設け、遺構・遺物の有無を確認に努めた。表土除去と埋め戻し作業は0.7㎡の重機を用いたが、それ以外の遺構検出作業および精査作業は人力で行った。

記録図面は、遺構が確認された調査区については、平板測量を用いてS=1/50の縮尺率で作成したが、遺構が確認されなかった調査区については地形図に調査区を図示するに留めた。記録写真は、カラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルムで行い、適宜デジタルカメラを使用した。出土した遺物は、出土地点・遺構・層位・日付等を記録した上で取り上げた。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市小高区片草南原

調査期間 平成17年5月26日～6月2日

対象面積 11,021㎡

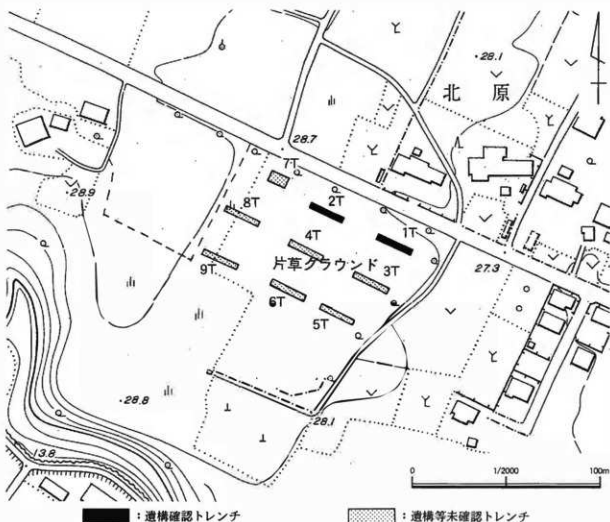


図35 片草南原遺跡トレンチ配置図 (S=1/2000)

調査面積 480m²

調査担当 川田 強

発掘補助員 佐々木慎太郎・発田 清

調査成果

1 T : 対象区域の北東部に東西方向に設定した3m×20mの調査区である。表土から約30cmの深さで調査区東側に4.5m前後の黒褐色土の分布が確認できる。この黒褐色土は遺構の南東部で直角に近い角度を有し、方形プランを持つことから、竪穴住居跡(SI01)と考えられる。また、SI01の西側、調査区ほぼ中央の北壁付近にSI01と推定した黒褐色土に類似した黒褐色土を観察できる。この黒褐色土が分布する範囲の大部分は調査区の北側に及んでいるため、全体の形状については不明であるが、遺構南側がほぼ直角に近い角度を有していることから、竪穴住居跡の可能性が高いと見ている(SI03)。

SI01とした遺構から内面が黒色処理されたロクロ使用段階の杯が出土していることから、SI01は9世紀所産と考えられる。SI03とした遺構からは遺物は出土していないが、遺構内の堆積土がSI01に類似していることから、SI01と同時期あるいは近接した時期と推測している。

2 T : 対象区域北側の中央に東西方向に設定した3m×20mの調査区である。表土から約30cmの深さで調査区中央北壁に沿って5.6m前後の黒褐色土が広がる。この黒褐色土は遺構の南東・南西部ではほぼ直角に近い角度を有し、平面プランが方形になる可能性が高いことから、竪穴住居跡(SI02)と推定している。

SI02とした遺構からロクロが使用され、内面に黒色処理が施された杯が出土していることから、SI02の所属時期は9世紀と考えられる。

3 T : 1トレンチの約16m南側に東西方向に設定した3m×20mの調査区である。遺構検出面であるロームまで掘削した。内面が黒色処理された杯の小破片をはじめ数点の土師器が出土したが、遺構は確認されなかった。

4 T : 2トレンチの約16m南側に東西方向に設定した3m×20mの調査区である。遺構検出面であるロームまで掘削した。数点の土師器の小破片が出土したが、遺構は確認されなかった。

5 T : 3トレンチの約20m南側に東西方向に設定した3m×20mの調査区である。遺構検出面であるローム層まで掘削した。須恵器ならびに土師器の小破片が1点ずつ出土

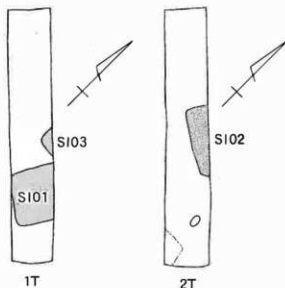


図36 トレンチ平面図

したが、遺構は確認されなかった。

6 T：6トレンチは4トレンチの約20 m南側に東西方向に設定した3 m×20 mの調査区である。遺構検出面であるロームまで掘削したが、遺構・遺物は確認されなかった。

7 T：対象区域北西部に東西方向に設定した6 m×10 mの調査区である。遺構検出面であるロームまで掘削した。須恵器・土師器の小破片が数点出土したが、遺構は確認されなかった。

8 T：7トレンチの約21 m南側に東西方向に設定した3 m×20 mの調査区である。遺構検出面であるロームまで掘削した。内面に黒色処理が施された杯をはじめ土師器の小破片が数点出土したが、遺構は確認されなかった。

9 T：8トレンチの約22 m南側に東西方向に設定した3 m×20 mの調査区である。遺構検出面であるローム層まで掘削したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第5項 調査所見

今回の調査では、1・2トレンチにおいて平安時代の竪穴住居跡と推測される遺構が確認されたことから、本遺跡が平安時代の集落跡であることが推測される。また、隣接した荒神前遺跡でも平安時代の竪穴住居跡が確認されており、本遺跡が立地する段丘の広範囲にわたり平安時代の集落が形成されていたことが推察される。

3～9トレンチでは、土師器等の遺物は出土したものの、明確な遺構を確認することはできなかった。このような調査結果と本土木工事内容を検討した結果、1・2トレンチを中心に要保存対象区域が設定され、開発を行う場合には、盛土等の工法対応による遺跡の保全が望ましいが、工事により遺跡が破壊される場合には発掘調査が必要である。それ以外の地区においては、発掘調査の必要はないと判断されるが、埋蔵文化財包蔵地内であることから慎重な工事施工を要する。

第4節 荒神前遺跡

第1項 調査に至る経過

本遺跡の調査は、携帯電話のシリンダー型電波塔等の設置工事に伴い、平成16年9月に提出された「埋蔵文化財の有無ついて（照会）」に基づいて、埋蔵文化財包蔵地台帳との照合ならびに現地踏査を実施した。本開発予定地には、周知の埋蔵文化財包蔵地である『荒神前遺跡』に所在しており、事前に試掘調査による遺構・遺物の確認と、その結果による保存協議が必要であることを回答した。

第2項 遺跡概要

本遺跡は、小高川支流の前川北側の河岸段丘に所在し、片草南原遺跡の東側に隣接している縄文時代～平安時代の複合遺跡である。平成14～16年にかけて町道西堂・金場台線の改良工事に伴い発掘調査が実施され、奈良・平安時代の竪穴住居跡等が確認されている。

本遺跡は、段丘の南側縁辺部に一里段古墳群・荒神前古墳を内在している。一里段古墳群は、約300mの範囲に3基の円墳が確認されている。個人宅地造成に起因する土砂採取に伴い、平成12年に1号墳の調査が実施された。その結果、埋葬施設は木棺直葬で、6世紀後半に構築されたことが明らかとなった。また、1号墳の南西に同時期の竪穴住居跡が検出されている（註1）。荒神前古墳は、一里段古墳群の東側約300mに立地する径6mの円墳と登録されているが、現在、墳丘部は後世の掘削を受けて消滅している。両古墳群より西側の同一段丘上に所在する片草南原古墳群を含めると、本遺跡が立地する段丘の南側縁辺部には10数基の古墳が帯状に分布しており、その範囲は約1kmに及ぶ。

台地東側の斜面には、縄文前期前半の片草貝塚が所在する。片草貝塚は、現在の海岸線からの距離は約4.2kmであり、小高川流域で最も内陸に位置する貝塚である。

第3項 調査の方法

開発計画地内に4×10mのトレンチを設け遺構・遺物の確認を行った。表土除去と埋め戻し作業は0.7mの重機を用いたが、それ以外の遺構検出作業および精査作業は人力で行った。調査の記録の作成は、調査箇所は地形図の中に調査区を図示し、記録写真は35mm判カラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルムで作成し、適宜デジタルカメラを使用した。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市小高区片草字荒神前
調査期間 平成16年10月14日
対象面積 221.8㎡

調査面積 40m²
 調査担当 川田 強
 発掘補助員 発田 清



図37 調査状況図 (S=1/2000)

調査成果

7 T : 開発予定地中央部よりやや西側に設けた4×10 mの南北方向のトレンチである。表土下約40cmで遺構確認面であるロームを確認した。奈良・平安時代所産の土師器が少量出土したが、明確な遺構等は検出されなかった。

第5項 調査所見

本遺跡の調査は、トレンチを設定し遺構・遺物の確認に努めた。遺物が少量確認できたものの遺構は確認されなかったことから、本計画地には、遺構は分布していないと考えられる。したがって、本地点で計画された土木工事に対する発掘調査の必要性はないと判断されるものの、当該地点は周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重な工事施工を要する。

なお、本計画地の南側では道路改良工事に伴い発掘調査が実施され、平安時代の竪穴住居跡が検出されている。また、一里段古墳群の調査では6世紀後半と推定される竪穴住居跡が確認されている。このように荒神前遺跡が立地する本台地上は、古墳～平安時代にかけて集落として利用されていたことが明らかとなっている。

(注1) 川田 強 2001 「一里段古墳群1号墳」『小高町埋蔵文化財調査報告1』小高町文化財調査報告第2集

第5節 日向横穴墓群

第1項 調査に至る経過

個人住宅建設に際して埋蔵文化財の有無についての照会があり、埋蔵文化財包蔵地台帳との照合ならびに現地踏査を実施した。当該計画地には周知の埋蔵文化財包蔵地である『日向横穴墓群』が存在しているため、事前に試掘調査を実施して遺構・遺物の有無を確認し、その結果をもって保存協議する必要である旨を回答した。

第2項 遺跡概要

本遺跡は、小高川下流北側の沖積地に張り出す標高20mを測る舌状の低位段丘の南端に所在する古墳時代終末の横穴墓群である。昭和38年に宅地造成に伴う工事により、横穴墓の一部が削平され、「八万」と記された墨書土器を含め、土師器が4点出土している。本遺跡群には、横穴墓が5～6基現存しているとされる。そのうち1号墓は、玄室の内壁が直立し、天井はドーム形である。玄室の平面形は隅丸長方形を呈している。また、玄室奥壁に接して造出石棺状台床が確認されている。これらのことから、福島県における横穴墓の祖型として注目され、昭和57年に旧小高町の指定文化財に指定されている。

本遺跡の周辺には、塚原古墳群・堂林横穴墓群・諏訪原遺跡・横山古墳群・清信遺跡・原遺跡・大井花輪遺跡等多数の遺跡が存在するが、発掘調査が実施されていないため詳細は不明である。

第3項 調査の方法

本遺跡の調査は、開発計画地に2m×10mのトレンチ4本を設定して、遺構・遺物の確認に努めた。表土除去は0.25㎡の重機を用い、それ以外の遺構検出作業・精査作業は人力で行った。調査記録の作成は、調査箇所は地形図の中に調査区を図示し、35mm判モノクロネガフィルムで作成し、適宜デジタルカメラを使用した。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市小高区塚原字日向

調査期間 平成16年6月9日

対象面積 1,124㎡

調査面積 80㎡

調査担当 川田 強

発掘補助員 発田 清

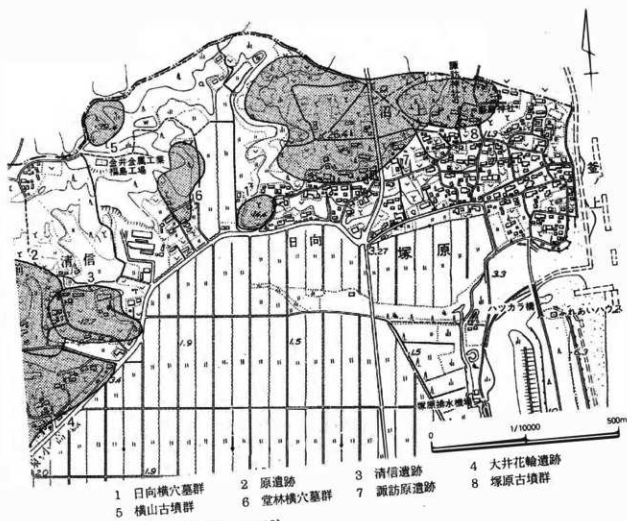


図38 日向横穴墓群位置図 (S=1/10000)

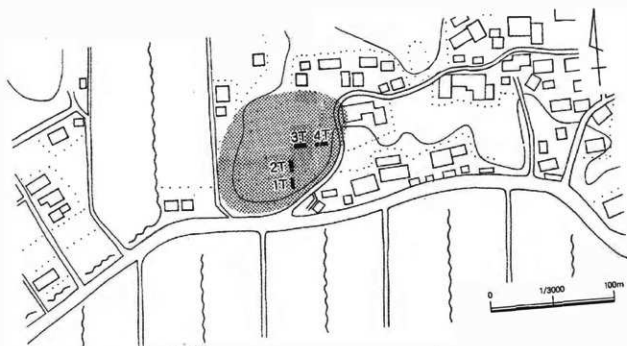


図39 調査状況図 (S=1/3000)

調査成果

- 1 T : 対象区域の南部に南北方向に設けた2 m × 10 mのトレンチである。遺構確認面であるロームまで掘削したが、構構・遺物は確認されなかった。
- 2 T : 1 Tの北側約7 mの地点に南北方向に設けた2 m × 10 mのトレンチである。遺構確認面であるロームまで掘削したが、構構・遺物は確認されなかった。
- 3 T : 対象区域のほぼ中央部に東西方向に設けた2 m × 10 mのトレンチである。遺構確認面であるロームまで掘削したが、構構・遺物は確認されなかった。
- 4 T : 3 Tの東側約11 mの地点に東西方向に設けた2 m × 10 mのトレンチである。遺構確認面であるロームまで掘削した。土師器と思われる小破片が1点出土したが、構構は確認されなかった。

第5項 調査 所 見

本遺跡は、開発予定地内に4本のトレンチを設けて遺構・遺物の確認を行った。4トレンチからは土師器の破片が1点出土したが、他のトレンチからは遺物は出土しなかった。また、いずれのトレンチからも明確な遺構は確認されないことから、本開発予定地には遺構は分布していないと思われる。したがって、本開発予定地では発掘調査の必要はないと判断されるが、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するため慎重工事を必要とする。

第V章 保存目的の調査

第1節 菖蒲沢野馬土手

第1項 調査に至る経過

菖蒲沢野馬土手は昭和45年に町指定文化財に登録されたが、指定時に測量調査を実施していなかったため、指定範囲ならびに所在地については不明な部分があるという課題が残されていた。このことから指定範囲ならびに所在地を明確にするために測量調査を行った。また、本野馬土手は、構造に関連した調査資料が少ないことから、構造についての資料を得るために試掘調査を実施した。さらに、土手内側法面に構築された石垣の一部が、土手に育成した樹木の生長に伴い崩壊してきており、その現状を把握して今後の保存管理について協議するための資料を得る目的で現地踏査を実施した。

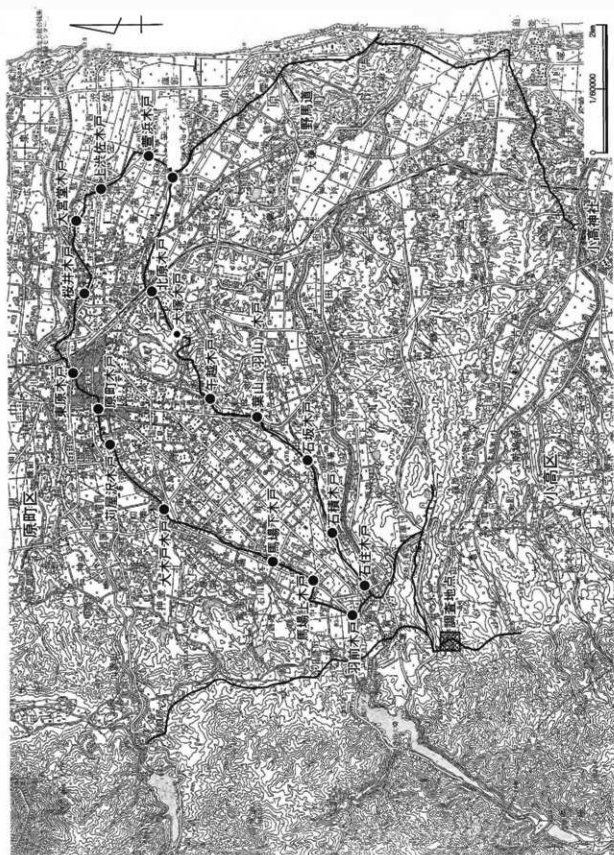
第2項 遺跡概要

野馬土手は、国指定重要無形民俗文化財に指定されている「相馬野馬追」に関連する数少ない考古資料として注目される。中世段階における野馬追の実体は不明な部分が多いが、藩政時代には阿武隈高地東縁の平地に野馬を放ち、妙見神馬の牧として特別に保護した。この野馬を年に一度、領内から集めた武士達が諸種の軍法を用いて遠く小高神社の境内に設けた竹矢来に追い込み、その中から神の思召にかなうような駿馬を捕らえて社前に奉った。これら一連の行事が野馬追であり、ここにいう妙見神馬の牧が野馬追原（現在の雲雀ヶ原周辺）である。

ところで、藩主にとって保護されていた野馬は増殖し、周囲の農作物を食い荒らすなどの被害が頻発するようになった。これを受けて、中村藩3代藩主相馬忠胤が、寛文6年から数年の歳月をかけて野馬の保護・繁殖と野馬による農作物への被害を防ぐことを目的として高土手を構築した。野馬土手とは、この高土手の総称である。

南相馬市内に所在する野馬土手は、原町区の大部分を取り囲むように築かれており、西東約8km、南北約2kmの範囲内にめぐると考えられている。さらに、野馬土手は石住木戸から畦原を経て原町区と小高区の境界沿いを西に走り、原町区西木戸周辺で南北に分かれて北は原町区孫四郎、南は小高区羽倉方面に延びている。また、土手内外への交通を確保するために、所々に出入口として木戸を設けた（註1）。野馬土手の構造は、場所によって相違は認められるものの、基本的には土手とその内側に巡らされた堀によって構成され、土手内側は強い傾斜を持ち、外側は緩やかな傾斜を持つ構造になっている。また、野面積みで石垣を構築している場所も見受けられる。構築当時の野馬土手の規模は、上幅6尺、底幅18尺、高さ6尺の台形に統一したと伝えられている（註2）。

菖蒲沢野馬土手は、阿武隈高地麓部が平坦地（高地）と接する標高120～150mの山林中に南北に断続して連なる遺跡で、土手内側には野面積みで石垣が構成されている。平成5年に県



※黒掛地木戸から小高神社までは野馬道である。

図40 野馬土手全体図

営治山事業に伴い発掘調査がおこなわれている。

菖蒲沢野馬土手から南に約900mの地点に本野馬土手と同様に内割が野面積みの石垣で構築されている高木戸野馬土手が所在し、市指定の文化財に指定されているが、発掘調査等が実施されておらず詳細は不明である。

第3項 調査の方法

試掘調査は、野馬土手内割に接するかたちで幅2m×3mのトレンチを東西方向に設定して遺構・遺物の有無を確認した。表土除去から遺構検出作業・埋め戻しまで人力で行った。調査記録の作成は、記録写真は35mm判カラーリバーサルフィルム・モノクロフィルムで行い、適宜デジタルカメラを使用した。記録図面は、平面図についてはS=1/100の縮尺率で、断面図についてはS=1/20で作成した。また、調査範囲内に設置した基準杭の測量を測量会社に委託しておこなった。

第4項 調査要項と成果

調査要項

所在地 南相馬市小高区羽倉字太良谷地
 調査期間 平成17年9月13日～10月3日
 対象面積 1,500㎡
 調査面積 12㎡
 調査担当 佐川 久
 発掘補助員 佐々木慎太郎・発田 清

調査成果

1 T：北側に設けた調査区で、土手内割に2m×3mで東西方向に設定した。表土(L1)下に黒色の旧表土(L2・3)を確認した(図42)。L2・3は約20cmの厚さで堆積しており、これらの下位には小レキを比較的多く含み地山と推測される黄褐色砂質土が確認される。トレンチ内からは、溝・堀等の遺構ならびに遺物は確認できなかった。石垣の崩壊を防ぐために土手については表土の掘削はおこなわずにトレンチの長軸方向あわせて断面図を作成した(図42)。断面の形状は下幅が広い台形を呈し、土手の規模は、上幅0.9m、下幅6.6m、高さ1.8mを計測する。内割は急傾斜を持つ構造で野面積みにより石垣を構築している。石垣がL2を10cm程度掘り込んでいることを確認した。石垣は土台となる下部には大型の石を、上部には大型の平石を配し、その間にはやや小型で拳大から人頭大の石が積み上げられている。

2 T：南側に設けた調査区で、土手内割に2m×3mで東西方向に設定した。トレンチ内の様相ならびに石垣部の構造は1トレンチと同様である。表土下に約20cmの厚さで黒色の旧表土を確認した。旧表土下には地山と考えられる小レキを比較的多く含む黄褐色砂質土が堆積



図41 調査状況図 (S=1/3000)



1 葛蒲沢野馬土手1トレンチ北壁断面図

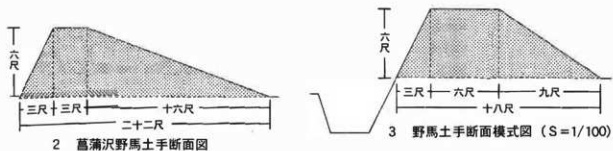


図42 野馬土手断面図・断面模式図

している。トレンチ内からは溝・堀等の遺構・遺物は確認できなかった。石垣は、旧表土を10cm程掘り込んで野面積みで構築されており、土台となる下部には大型の石を、上部には大型の平石を配し、その間にはやや小型で拳大から人頭大の石が積み上げられている。

第5項 調査所見

今回の調査で相馬野馬追に関連する貴重な資料が得られた。ここでは、これらの資料とともに原町区で調査成果をふまえて記述していくことにする。

菖蒲沢野馬土手は、小高区羽倉字太良谷地内に所在し、指定範囲の長さ約130mで、規模は上幅3尺(0.9m)、下幅22尺(6.6m)、高さ6尺(1.8m)を測り、断面形は台形を呈し、土手内側には、堀等の遺構が伴わないことが確認された。一方、南相馬市原町区青葉町・萱浜地内で確認されている野馬土手は、青葉町で上幅11尺(3.4m)、下幅25尺(7.5m)、高さ5尺(1.5m)を測り、萱浜で上幅10尺(3m)、下幅23尺(7m)、高さ5尺(1.5m)を計測する(註3)。両土手とも内側に土手と平行する堀を伴う。菖蒲沢の土手は、表土を除去して断面の計測していないため一概には言えないが、青葉町・萱浜の土手の方が上幅7～8尺(2.1～2.5m)、下幅1～3尺(0.4～0.9)m広いが、高さは菖蒲沢土手の方が1尺(0.3m)高い。また、構築当時の基本的な規模とされる上幅6尺(1.8m)、下幅18尺(5.4m)、高さ6尺(1.8m)に、菖蒲沢野馬土手の高さのみが当てはまる。これら数値の違いは、構築当時の違いなのか、後世の掘削の影響によるものなのかは現時点では判断できない。今後の課題である。

また、現時点では野馬土手に平行する堀を伴うタイプと持たないタイプの2種類の構造が確認されている。なぜ、このように構造に違いが生じるのかは、検討できる調査資料が少ないため、現段階では不明である。これらについては、今後の調査資料の増加を待って比較検討していきたい。

菖蒲沢野馬土手の内側は野面積みで石垣を構築しており、底部ならびに上部に大型の石を配し、その間にやや小型の石を配置する構造であることを確認したが、石垣は土手に育成した樹木に生長に伴い一部が崩壊してきていることから、今後は計画的に保存管理を行う必要がある。

小高区内に所在する野馬土手については、調査がほとんどおこなわれておらず、範囲・規模・構造など不明な点が多いため、今後、分布調査や測量図の作成等の詳細な調査を実施し、それらを解明していくとともに、「相馬野馬追」に関連する数少ない考古資料として早急な保存対策が望まれる。

(註1) 図40には19箇所の木戸を図示したが、時代によってその数は異なる。

西 徹雄ほか2004『特別編Ⅲ野馬追』原町市史10巻原町市

(註2) 玉川一郎1990『野馬土手跡範囲確認調査報告書』原町市教育委員会

(註3) 斎藤直之ほか2005『野馬土手』『原町市内遺跡発掘調査報告書10』

原町市埋蔵文化財調査報告書第35集 原町市教育委員会

引用・参考文献

- 植村泰徳ほか 2004 『内屋敷遺跡』『堀川西部地区遺跡発掘調査報告書7』堀川町文化財調査報告第12集
堀川町教育委員会
- 大越道正ほか 1980 『佐平林遺跡 (VII・VIII区)』『母畑地区遺跡発掘調査報告5』福島県文化財調査報告書第85集
福島県教育委員会ほか
- 大竹憲治ほか 1990 『双葉・郡山貝塚の研究』双葉町埋蔵文化財調査報告第7号 双葉町教育委員会
- 門脇秀典ほか 2003 『上平A遺跡』『常磐自動車道遺跡調査報告37』福島県文化財調査報告書第414集 福島県教育委員会
- 川田 強 2001 『北原貝塚遺跡群』『加賀後遺跡』「一里段古墳群1号墳」『中村平遺跡』『小高町内埋蔵文化財調査報告1』
小高町文化財調査報告第2集 小高町教育委員会
- 川田 強ほか 2004 『北原貝塚遺跡群』小高町文化財調査報告書第5集 小高町教育委員会
- 川田 強・佐川 久ほか 2005 『浦尻貝塚』小高町文化財調査報告書第6集 小高町教育委員会
- 興野善一 1967 『大木式土器理解のために (I)』『考古学ジャーナル13』ニューサイエンス社
- 日下部善己ほか 1971 『浦尻貝塚』福島大学考古学研究会発掘調査報告書第1冊 福島大学考古学研究会
- 小暮伸之 1996 『猪倉B遺跡』『相馬開発関連遺跡調査報告IV』福島県文化財調査報告書第326集 福島県教育委員会ほか
- 佐藤典邦ほか 1986 『弘源寺貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告13 いわき市教育委員会
- 佐藤政則ほか 1998 『泉原貝塚発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第45集 日立市教育委員会
- 縄文セミナーの会 2006 『第19回縄文セミナー前期前葉の再検討』
- 鈴木良一ほか 1996 『獅子内遺跡 (第1次調査)』『摺上川ダム遺跡発掘調査報告II』福島県教育委員会ほか
- 鈴木良一ほか 1997 『獅子内遺跡 (第2次調査)』『摺上川ダム遺跡発掘調査報告IV』福島県教育委員会ほか
- 鈴木良一ほか 1998 『獅子内遺跡 (第3次調査)』『摺上川ダム遺跡発掘調査報告VI』福島県教育委員会ほか
- 鈴木良一ほか 1999 『獅子内遺跡 (第4次調査)』『摺上川ダム遺跡発掘調査報告VII』福島県教育委員会ほか
- 鈴木良一 1999 『獅子内遺跡 (第4次調査) 第5章まとめ』『摺上川ダム遺跡発掘調査報告VII』前掲
- 鈴木素行 1998 『泉原貝塚における土器群の編年と系統』『泉原貝塚発掘調査報告書』前掲
- 高橋信一ほか 1994 『贗戸川地区発掘調査報告書II』福島県文化財調査報告書第299集 福島県教育委員会
- 竹島国基 1975 『第4章考察』『宮田貝塚』小高町教育委員会
- 玉川一郎 1981 『舞台一福島県天栄村における古墳時代集落跡の調査一』天栄村教育委員会
- 玉川一郎・吉田秀亨 1988 『角部内南台東貝塚』小高町教育委員会
- 長島雄一ほか 1983 『赤沼遺跡試掘調査報告』原町市教育委員会
- 芳賀美一ほか 1984 『青宮遺跡』会津高田町教育委員会
- 引地光太 1997 『獅子内遺跡』『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告5』福島市教育委員会ほか
- 藤谷 誠 1995 『萩原遺跡』『贗戸川地区遺跡発掘調査報告III』福島県文化財調査報告書第323集 福島県教育委員会
- 堀江 格 1993 『下ノ平A遺跡』『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告2』福島市教育委員会ほか
- 堀江 格 1996 『下ノ平D遺跡』『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告4』福島市教育委員会ほか
- 堀江 格ほか 1997 『西ノ前遺跡』『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告5』前掲
- 堀江 格 2004 『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告13総括編』福島市教育委員会ほか
- 堀江 格 2006 『南東北の様相一福島県を中心に』『第10回縄文セミナー前期中葉の様相』前掲
- 堀 耕平ほか 2000 『広畑遺跡』『泉宮高平地区は場整備事業関連遺跡発掘調査報告書1』
原町市埋蔵文化財調査報告書第21集 原町市教育委員会
- 堀 耕平ほか 2001 『町遺跡』『法橋寺遺跡』『泉宮高平地区は場整備事業関連遺跡発掘調査報告書II』
原町市埋蔵文化財調査報告書第26集 原町市教育委員会
- 堀 耕平ほか 2002 『泉境寺跡』『荒井前遺跡』『泉宮高平地区は場整備事業関連遺跡発掘調査報告書III』
原町市埋蔵文化財調査報告書第29集 原町市教育委員会
- 日黒吉明ほか 1978 『佐平林遺跡 (I~IV区)』『母畑地区遺跡発掘調査報告書II』福島県文化財調査報告書第67集
福島県教育委員会ほか
- 山内清男 1979 『日本先史土器の鑄成』先史考古学
- 横須賀倫道ほか 2002 『江平遺跡』『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告12』福島県文化財調査報告書第406集
福島県教育委員会ほか
- 吉田秀亨ほか 1995 『段ノ原A遺跡・段ノ原B遺跡』『相馬開発関連遺跡調査報告III』福島県文化財調査報告書第312集
福島県教育委員会ほか
- 吉田秀亨 1995 『第4編考察』『相馬開発関連遺跡調査報告III』前掲
- 吉田秀亨ほか 1997 『山田B遺跡』『相馬開発関連遺跡調査報告V』福島県文化財調査報告書第333集
福島県教育委員会ほか
- 吉田秀亨 1997 『第3編総括第2章縄文時代前期前葉の遺構と遺物 第1節 縄文土器』
『相馬開発関連遺跡調査報告V』前掲
- 吉田秀亨ほか 1990 『八重米坂A遺跡』『原町市火力発電所関連遺跡調査報告1』
福島県文化財調査報告書第236集 福島県教育委員会ほか
- 吉田博行ほか 2003 『中平遺跡』『会津板下町内遺跡発掘調査報告書II』会津板下町文化財調査報告書第54集
会津板下町教育委員会

写 真 图 版

図版 1 加賀後遺跡 (試掘調査)



1 23トレンチ調査状況



2 24トレンチ調査状況



1 第1地点調査状況①



2 第1地点調査状況②



1 SB01-02 SA01 検出状況



2 SB01-P33 断面



3 SB01-P33 完掘



4 SB01-P36 断面



5 SB01-P36 完掘



1 SB02-P37 断面



2 SB02-P37 完掘



3 SB02-P41 断面



4 SB02-P41 完掘



5 SA01-P32·59 断面



6 SA01-P32·59 完掘



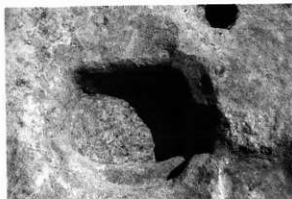
7 SA01-P44 断面



8 SA01-P44 完掘



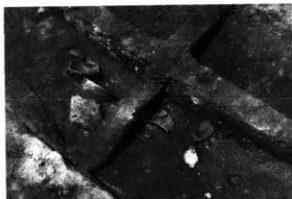
1 SK01 遺物出土状況



2 SK01 完掘



3 SK02 遺物出土状況①



4 SK02 遺物出土状況②



5 SK02 断面



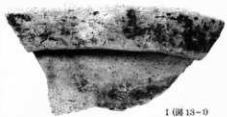
6 SK02 完掘



7 SK03 完掘



8 遺物包含層北壁断面



1 (図 13-0)



2 (図 13-2)



3 (図 13-3)



4 (図 13-4)



5 (図 14-1)



6 (図 14-2)

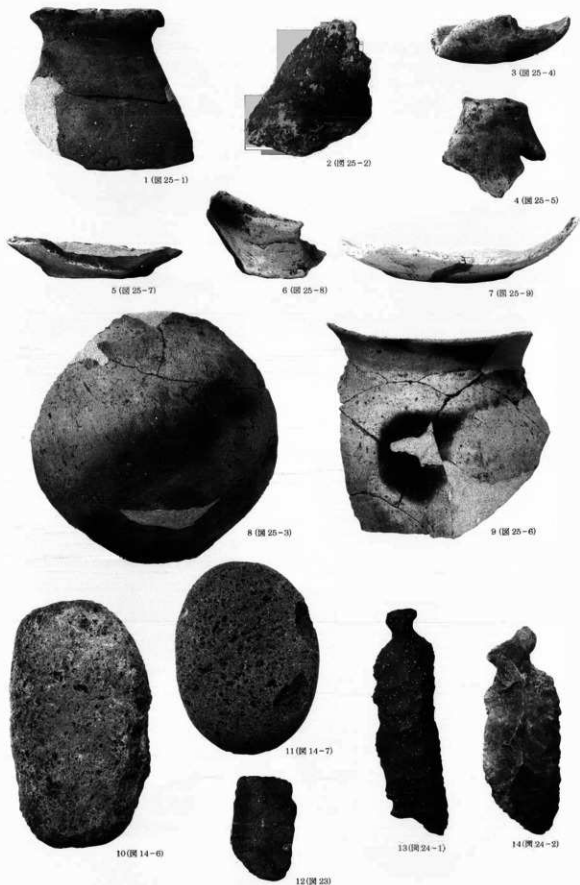


7 (図 14-3)

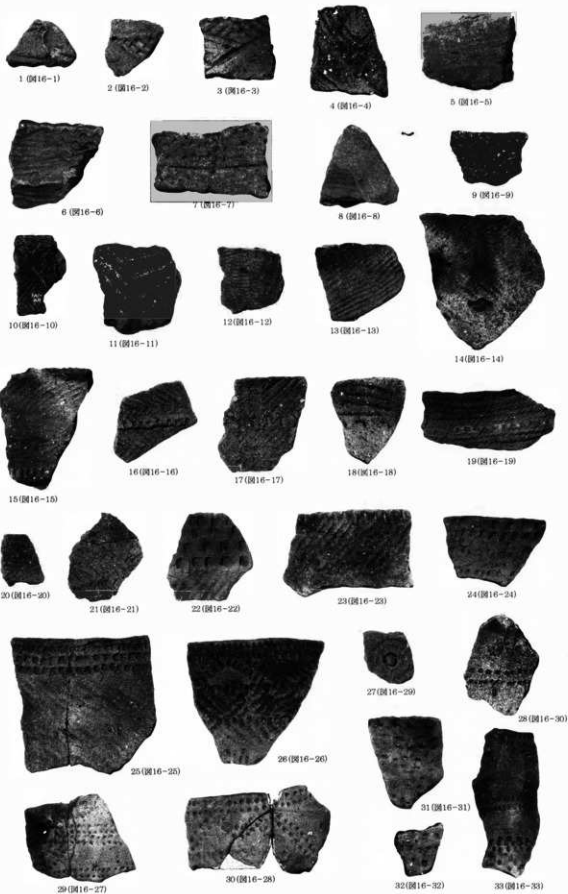


8 (図 14-4)

図版 7
加賀後遺跡(本調査)

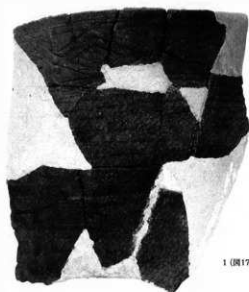


加賀後遺跡出土遺物②



加賀後遺跡出土遺物③

図版 9 加賀後遺跡 (本調査)



1 (M17-1)



2 (M17-2)



3 (M17-3)



4 (M17-4)



5 (M17-5)



6 (M17-6)



7 (M17-6)

加賀後遺跡出土遺物④



1 (圖17-9)



2 (圖17-10)



3 (圖17-11)



4 (圖17-12)



5 (圖17-15)



6 (圖18-1)



7 (圖18-2)



8 (圖18-3)



9 (圖18-4)



10 (圖18-5)



11 (圖18-6)



12 (圖18-7)



13 (圖18-8)



14 (圖18-9)



15 (圖18-10)



16 (圖18-11)



17 (圖18-12)



18 (圖18-13)



19 (圖18-14)



20 (圖18-15)



21 (圖18-16)



22 (圖18-17)



23 (圖18-18)



24 (圖18-19)



25 (圖18-20)

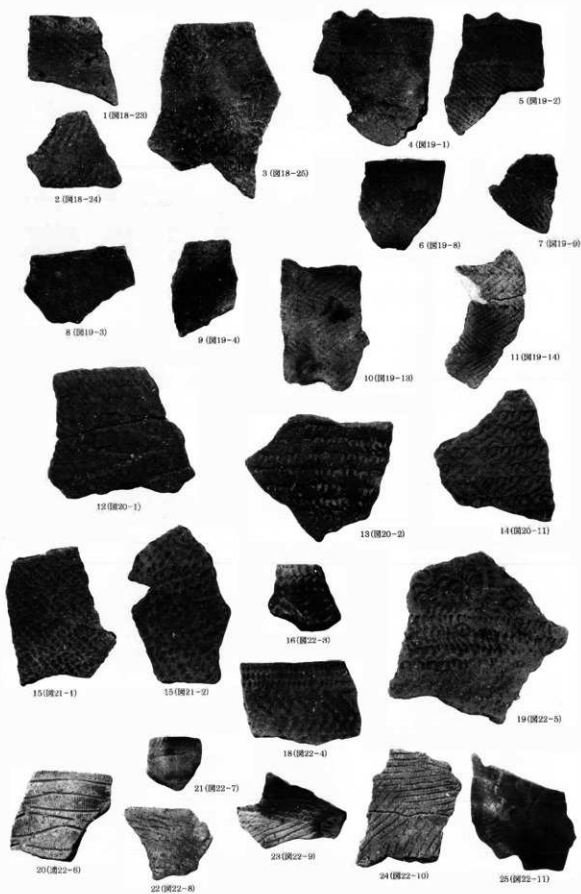


26 (圖18-21)



27 (圖18-22)

図版 11 加賀後遺跡 (本調査)



加賀後遺跡出土遺物⑥



1 10トレンチ調査状況



2 10トレンチ断面



3 10トレンチ埋設土器検出状況



4 12トレンチ調査状況



5 12トレンチ断面



6 12トレンチ遺物出土状況



7 表土掘削状況



8 作業風景



1 北原貝塚遺跡群 15トレンチ調査状況



2 北原貝塚遺跡群 14トレンチ調査状況



3 片草南原遺跡 1トレンチ調査状況



4 片草南原遺跡 2トレンチ調査状況



5 片草南原遺跡 3トレンチ調査状況



6 片草南原遺跡 7トレンチ調査状況



1 荒神前遺跡 7 トレンチ調査状況



2 日向横穴墓群 1 トレンチ調査状況



3 日向横穴墓群 2 トレンチ調査状況



4 日向横穴墓群 3 トレンチ調査状況



5 日向横穴墓群 4 トレンチ調査状況



1 1トレンチ調査状況



2 1トレンチ断面①



3 1トレンチ断面②



4 1トレンチ石垣検出状況



5 2トレンチ調査状況



6 2トレンチ石垣検出状況



7 石垣現況



8 土手現況

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみそうましないいせきはくつちょうさほうこくしょ2						
書名	南相馬市内遺跡発掘調査報告書2						
副書名	平成16・17年度調査報告						
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第3集						
編著者名	佐川 久・川田 強・荒 淑人						
編集機関	福島県南相馬市教育委員会文化課						
所在地	〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目45番 TEL0244-24-5284						
発行年月日	西暦2006(平成18年)3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯		調査期間 上段:着 下段:完	面積 (㎡)	調査 原因
			東	経			
加賀後遺跡	南相馬市小高区 上浦字加賀後	072125	37° 31' 21"	140° 59' 18"	040729	562.1	個人宅地
		00033			040817		
大田和広畑遺跡 (平成16年度)	南相馬市小高区 敷崎字広畑	072125	37° 32' 49"	140° 56' 48"	040630	180	道路改良
		00024			040630		
大田和広畑遺跡 (平成17年度)	南相馬市小高区 大田和字広畑	072125	37° 31' 01"	141° 01' 52"	051114	90	道路改良
		00055			051207		
北原貝塚遺跡群	南相馬市小高区 浦尻字北原	072125	37° 31' 01"	141° 01' 52"	040913	120	個人宅地
		00055			040913		
片草南原遺跡	南相馬市小高区 片草字南原	072125	37° 34' 36"	140° 57' 59"	040526	480	道路改良
		00006			040602		
荒神前遺跡	南相馬市小高区 片草字荒神前	072125	37° 34' 20"	140° 58' 30"	041014	40	携帯無線 基地
		00009			041014		
日向横穴墓群	南相馬市小高区 塚原字日向	072125	37° 34' 21"	141° 00' 58"	040609	80	個人宅地
		00041			040609		
葛蒲沢野馬土手	南相馬市小高区 羽倉字太良谷地	072125	37° 35' 09"	140° 54' 54"	040913	12	保存目的
		00058			041003		
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特 記 事項	
加賀後遺跡	集落跡・貝塚	縄・弥・古・奈・平	遺物包含層・土坑・ 掘立柱建物・構列		縄文土器・土師器		
大田和広畑遺跡	散布地	縄文・平安	遺物包含層		縄文土器		
北原貝塚遺跡群	集落跡・貝塚	縄文・弥生	埋設土器・土坑		縄文土器・弥生土器		
片草南原遺跡	集 落 跡	縄・古・奈・平	竪穴住居		土師器		
荒神前遺跡	集 落 跡	縄・古・奈・平	なし		なし		
日向横穴墓群	横穴墓群	古墳	なし		なし		
葛蒲沢野馬土手	土 手	近世	石垣・土手		なし		

南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第3集

南相馬市内遺跡発掘調査報告書 2

—平成 16・17 年度調査報告—

印刷 2006 年 3 月 25 日

発行 2006 年 3 月 31 日

編集 南相馬市教育委員会 文化課

発行 南相馬市教育委員会

〒975-0012

福島県南相馬市原町区三島町二丁目 45 番地

印刷所 株式会社 まつぎ印刷

〒979-1525

福島県双葉郡浪江町大字高瀬字根木内 100